



第484号 「がんばろう、日本！」 国民協議会 機関紙

発行所「がんばろう、日本！」国民協議会 発行人 戸田政康 編集人 石津美知子 http://www.ganbarou-nippon.ne.jp (東京事務所) 東京都千代田区九段北4-3-16 TEL 03(5215)1330 FAX 03(5215)1333 (発行所) 東京都東大和市南郷2-17-16 パピルス会館 〒207-0014 TEL 042(566)2950(代) FAX 042(566)2949 (郵便振替)00160-9-77459 「がんばろう、日本！」国民協議会 ゆうちょ銀行 019店 当座0077459

1部 300円 定期購読 半年2,000円 一年3,500円

今号の紙面

- 2-6面 「一灯照輝」地方議員のコラム
●第九回大会 総会
6-9面 「選挙から自治を考える」
江藤俊昭・山梨学院大学教授
10-11面 「消費者民主主義と再政治化」
戸田政康・代表
11-12面 各地の報告

低投票率の構造のまま民主主義を衰退させるのか 縮退時代の争点設定で、民主主義をバージョンアップさせることができるか

低投票率の構造に どう向き合うか 埼玉県知事選が示唆するもの

8月25日投票の埼玉県知事選

選挙。当初は知名度で優勢とされていた自公推薦候補を破り、国民民主党を離党し「県民党」として戦った大野氏が当選を果たした。マスコミでは「与野党一騎打ち」と評されるが、大野氏は国政政党の推薦を要請せず(県連レベルでの支持)、草の根からの支持を積み上げて猛追した結果だ。既存政党の枠組みでは、埼玉県知事選の教訓は見えない。

「日本再生」482号のインタビューで大野氏は、「無所属県民党」として、永田町の力学や関係に左右されない勝手連的なネットワーク型の選挙に取り組むこと、これはある意味で壮大な社会実験」ともいえるが、これまでもおりの選挙では十年後に向けた舵は切れない、との趣旨を述べている。

ポイント、前回県知事選から5・68ポイント投票率がアップしたことだ。32・31という投票率は全国的にみれば「ワースト」の範疇だが、それでも統一地方選、参院選と続いた後の単

独選挙で6ポイント弱投票率を上げるには、それだけの県民が投票所に足を運ぶ気になる選挙戦を展開できなければならぬ。

「投票に行こう」というキャンペーンだけでは、どんなに斬新なキャンペーンでも、投票率は上がらない。低投票率は争点の不在(争点隠し)や「政治不信、無関心」の結果であり、その構造を変えようとする争点設定や選挙戦の展開によって、いわゆる無党派層の数がポイントが動き投票率が上がる結果、組織票のウェイトが相対化されることになる。

今回の埼玉県知事選は、その典型だろう。自公推薦候補は参院選のときから参院選候補と二人三脚で活動し、知事選では官邸直結をアピール、業界団体や県議後援会などの組織固めに徹したという。大野氏は上田知事の応援を受け、連日朝から夜まで街頭に立ち、一人ひとりの有権者と目線を合わせて政策を訴え、対話することに徹した。

出口調査によれば、大野氏は▽立憲民主、共産支持層の8割▽国民民主の7割▽社民の6割を固めたほか、自民の3割▽公明の2割にも食い込み、無党派

層からも6割の支持を集めた。一方の青島氏は推薦を受けた自民、公明支持層の7割、日本維新の会6割の支持も集めたが、無党派層は3割にとどまった。

争点設定という側面でも、この出口調査によれば、大野氏に投票した人の6割が「政策・公約」を基準に投票、「支持政党や団体の推薦」が2割で続いたのに対し、青島氏は「政策・公約」「人柄・イメージ」が3割ずつ、「支持政党や団体の推薦」が2割だ。

争点設定という点、「〇〇に賛成か反対か」とイメージがただが、争点は「与えられる」ものではなく「有権者が作る」ものだ(総会、江藤先生提起など参照)。つまり「政策・公約」で判断しようとする有権者に、投票所に足を運んでもらうことができてこそ争点設定だ。

その意味で、選挙直前に自民党が多数を占める県議会で急遽特別委を設置した「県庁建て替え」は、自公候補の「公共事業を増やす」公約とともに、「何のために、何に投資するのか」が、有権者からは争点化されたかもしれない。大野氏は「公共事業は必要かどうかであって増やすことが目的ではない」「県

庁建て替えより県民に必要なことがある」と訴えた。低投票率という現象の背景にある構造―選挙や政治が、くらしの問題と乖離している―に、どう向き合うか。埼玉県知事選の教訓は、この視点から統一地方選、参院選を総括する必要があることを示している。

新たな争点設定とその主体性が問われている

現代の民主主義の死は選挙から始まる、といっても過言ではない。「民主的」な選挙で選ばれた権力によって、立憲民主主義のルールや仕組みが死に追いつかれていくプロセスは、先進各国でも繰り返されてきている。わが国におけるその起点は、低投票率にあるといってもよいだろう。「安倍一強」を支えているのは、熱烈な支持というよりも、低投票率に表される「無関心」という「空気」だ。

いわゆる「安倍支持の空気」といわれる心象風景は、例えばこういふものだろう。「政治は助けてくれない、だから変わらなくていい」「だって自己責任でしょ」。あるいは「自分の生活は自分でなんとかするしかない

い。政治って、それができない人のためのものじゃない」と。くらしの問題は、私生活やマーケット・経済の領域で自力で解決することであり、ここに「政治」はかかわっていない。

こうした「無関心」の構造について、総会で江藤・山梨学院大学教授は「シビル・ミニマム」を手がかりに、以下のように述べている。(6-9面参照)

60年代、70年代の社会資本の充実(シビル・ミニマム)を求める市民運動は革新自治体を生みだし、投票率も保たれていたが、社会資本がある程度整備され「総与野党化」の流れが始まるのと並行して、投票率は低下していき、その背景には、社会資本の適正水準は多様であることから、一定水準以上は個人の選択・責任であるとして「政治」よりも「私生活」や「経済」の領域が重視されるようになったことがある(脱シビル・ミニマム)。

この自己責任論が新自由主義の下でさらに肥大化し、今日の「無関心」の地層に連なっている。縮退社会に向かうなかで、ここどこのように「新シビル・ミニマム」を争点設定できるのか。そしてその担い手主体をどうつくりだしていけるのか。これが「ポスト安倍政治」の問題設定である。

争点は自然発生的には浮上しない。例えば参院選で有権者がもっとも重視した政策は年金・社会保障だったが、与党は選挙前の国会審議に反せず、政府は本来なら選挙前に公表すべき法律で義務付けられた五年に一

度の年金財政の検証すら、選挙後に先送りした。権力側は争点を隠す。

また社会保障の財源として議論すべき財政についても、「財政民主主義」という観点をあいまいにしているから消費税も今は増税する時期か」とか、何パーセントならいいのかという状況論に終始する。これでは争点化できません。

税金は金持ちや特権階級からとればいい、という時代ではなくなった。つまり財政民主主義というときにどうするか。自分たちの必要を支えるために政府を構成し、そのための財源を広く参加して支えるということである。そういうことが全部抜けて、『景気がいいかどうか』『どの時期に増税するか』だけになっている。「金持ちから取れ」というのは、その裏返しです。増税不要論と先送り論がコインの裏表のようになって、社会の持続可能性という肝心な問題は争点化されずまま「非決定」になる(戸田代表 総会)。

争点は自然に浮上するものではないし、「与えられる」ものでもない。作り出すものだ。誰が? 市民が主権者として。自己責任論は、一方に「自分の生活は自分でなんとかするしかない。政治って、それができない人のためでしょ」という「無関心」を生み出しているが、他方で「少なくとも自分の人生は自分がオーナーだ」という生き方も生まれている。

レールのない時代、自分の人生は自分が切り開いていくしか

ない。自分の人生は自分で切り開かなくてはならないからこそ、人間としての尊厳や生存権は社会が、したがって政治がちゃんと保障せなあかんのじゃないかと。

ここから新たな政治への向き合い方―「くらしとせいじ」という再政治化―争点設定を、どのようにできるか。

こうした意味での「新シビル・ミニマム」について、高度成長期のシビル・ミニマムとの対比から、以下のようなことがいえるだろう。

ひとつは人口減・縮退社会という価値観の転換。経済も人口も右肩上がりが増えるときの「分配」をめぐるものとは、争点設定の軸がまったく違ってくる。結論を先取りして言えば、経済成長を前提にした「シジョン」から、持続可能性を前提にした「シジョン」へ、政策思想の軸の転換を伴うことなしに争点化はできない。この点で財政は重要なポイントになる。

もうひとつは多様性。シビル・ミニマムのニーズも適正水準も多様化している。同時に、その供給主体も公的部門だけではなくNPOや企業など多様化している。そのなかで「公的」な役割とはなにか、私的な領域、マーケットで解決できるものはなにか、人々の共同・協働の領域とはなにかを、再定義していくこと。その際には「課題を共有するところに公共は生まれる」ということが、基本的な指針となるはずだ。

そして「誰が」争点設定するのか。シビル・ミニマムは、第三者が「これが適正だ」と決めるものではなく、市民参加や熟議によって達成されるものであるとされる。新シビル・ミニマムも多様な市民が主権者として参画することで争点化される。そこでの市民参画は、行政や政治を

市民が「下から」動かすというよりも、市民が主体的なアクターとしてかかわっていくことによって切り開かれるだろう。例えばこのように。

「今日社会や地域で起きているさまざまな問題、市民の困りごとには、多岐にわたっています。空き家の問題、バス路線の廃止の問題、公共施設の縮小や維持の問題、ブラック企業や過労死や自死の問題、シングルマザー問題、子ども達の不登校やいじめや虐待など、新たな貧困と格差がますます広がっています。

これらの問題は、これまでの人口が増加して行く右肩上がりの時に制定された制度の外で起きている問題であり、市民が行政や政治にお願いするだけでは解決出来ない問題ばかりです。

私たち市民一人一人が当事者意識をもって、今自分が直面していない問題でも、私の問題ではなく、私たちの問題として、これまで主体的に受け止め、社会参加して行けるかが、大きなポイントです。

これは埼玉県知事選における大野候補の越谷での個人演説会、司会あいさつの一部。この個人演説会は、従来とはまったく違う市民主導で行われ、六人の市民がそれぞれの当事者性から「くらしとせいじ」を訴えた。そこに込められているのは、私や私たちの困りごとは、誰かに依存することで解決はできない、市民自身が当事者であり、これからの地域社会の主体的責任者であるということを、選挙という場を通じて可視化していくという試みだ。

低投票率の構造―消費者民主主義・自己責任・無関心―のまま、民主主義を衰退させていくのか、縮退時代の争点設定―再政治化から民主主義をバージョンアップさせることができるか。ポスト安倍政治の舞台は、このように設定されるだろう。

このように設定されるだろう。

一灯照隅 第一七五回

チームつまがりの2019統一地方選挙

津曲俊明(船橋市議会議員・同人)

4月の統一地方選挙では6976票、60人中の番目の当選という過大な評価をいただき、3期目の当選をさせていだ

4月の統一地方選挙では6976票、60人中の番目の当選という過大な評価をいただき、3期目の当選をさせていだ

津曲：それはズバリ 地方自治体×社会保障です！

津曲：それはもう、草の根レベルで現場から霞が関、永田町政治を変えていきたい、思うに至りました。



津曲：小さな課題を社会のインベションにつなげていく考えを政治の世界に入れていきたい、と強く感じました。

津曲：もう一つは、内部から見

津曲：もう一つは、内部から見

津曲：もう一つは、内部から見

津曲：もう一つは、内部から見

津曲：もう一つは、内部から見

津曲：もう一つは、内部から見

津曲：その気持ちが今でも変わらないからその「地方自治×社会保障」なんです。

津曲：その頃は、官僚もおかし

津曲：その頃は、官僚もおかし

津曲：その頃は、官僚もおかし

津曲：その頃は、官僚もおかし

津曲：その頃は、官僚もおかし

津曲：その頃は、官僚もおかし

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

津曲：いろいろ言われる方もい

2面から続く

な人材が次から次へバサバサ飛んで行った場合、津曲さんご自身はどのポジションにいるのがベストとお考えでしょうか？

津曲：私自身はより大きな選挙、首長選挙や国政選挙へ出て行った方が、チームをより育てていきやすいという気持ちがあります。

レポすけ：確かに大きな選挙ですね。

津曲：私の事務所自体が政治のインキュベーションの場になったら良いなあと考えています。

レポすけ：いろいろな可能性を孕んだ津曲事務所、いいですね。もちろんチーム作りや、チームに場を与えるだけじゃないですね。津曲さんは国会議員や市長になって、そこでさらに何を目指しますか？

津曲：国政であれば、総務大臣になってもっと地域に任せる地方分権とかやりたいですね。市長や知事であれば、全国にモデルとなる福祉や教育の姿を発信していきたいです。

レポすけ：国政選挙とか首長選挙とかホントに大きな話がでてくるんじゃないかと思いましたが、実に津曲さんらしい目標でレポすけ超安心しました(笑)

ついでに、

統一地方選2019！

津曲陣営の戦略とは？

レポすけ：政治家を志す理由、そして政治家として目指す道を示していただいたと聞いて、3期目となった今回の統一地方選2019について振り返っていただきますでしょうか！

レポすけ：まずは、自身で実際に駅頭や街宣車、ポスター貼りなどで体感した選挙戦を振り返って、たとえば地域によって選挙に対する温度差や格差など、どう感じられましたか？

津曲：これまでは自宅や事務所、出身中学の地域を中心にしていました。政党公認というところで、より広域に潜在的な支持者がいると仮定して、4倍ほど活動地域を広げましたので、より船橋全体を感じる事ができました。

レポすけ：4倍！意外と広がるもんですね。結構あちこち回られたんですね。

津曲：層間宣伝カーに乗って感じていたのは、船橋の西側やJR沿線では、子どもとお母さん達が圧倒的に多いという点でしょうか。ベテラン世代の多い地域で活動している中、手を振ったりしてくれることはありますが、この地域では目に見える反応は、あまりありません。

レポすけ：でもその気づきってとても大切ですね。

津曲：今、市の幹部の皆さんは「船橋は人口が増えている、増えている」と言っています。それは全体としてそうなのですが、地域によって実情は異なります。

レポすけ：ここに訴えているかわからない声よりも、人の顔を見て訴える声の方が届く気がしますよね。

津曲：そのことで印象的だったことがあります。投票者を『あみだ』で決めたという20代のお母さんの話です。

レポすけ：あみだ！(笑)その辺詳しく聞かせていただきますか？

津曲：その方はこう言いました。「この地域には市議さんもないし、でも投票に行かなきゃなと、あみだで決めていました。あなたは宣伝カーから降りてきたね。あなたは私たちに何をしてくれるの？」

レポすけ：その方のリアクションはいいか？

津曲：「ふーん」という反応でしたよ。これはわずかに分にも満たないやりとりでしたが、色々と考えさせられる出来事でした。

レポすけ：でもその気づきってとても大切ですね。

津曲：予想以上に多くの皆さんが事務所必要論を唱え、私の提案は見事に否決されました(笑)

レポすけ：チーム強し(笑)

津曲：いや、もう、頼もしいチームです(笑)軌道修正していくつか事務所の選択肢を探しました。予定より時間がかかりましたが、候補者のみが決めるのではなく、チームとして重要な決定に関わる、という形ができました。

レポすけ：そういうや、選挙ポスターも事務所ミーティングで決めていましたね。

津曲：あれもう、最初から容赦なくタメ出しの嵐でしたからね(笑)

津曲：皆さんのアイデアと尽力で、私の知らないうちにとんとん事務所内の姿が変わり、また自主的な取り組みも始まり、事務所の雰囲気もとても明るく、多くの皆さんに集っていただく「たまり場」になれたのではありません。

レポすけ：つ magari 事務所はレポすけも通ってましたが、選挙事務所というよりもサロンでしたものね。

津曲：「つ magari」がやる選挙「つ magari」の選挙、というものです。象徴的な話として、選挙事務所のことがあります。

過去二回の選挙では、二か月前に選挙準備の事務所を設け選挙に臨みました。しかし私自身ほとんど事務所にいないので、必要ないと思っていたんです。

レポすけ：準備段階でそんな話があったんですね。

津曲：でもチームの皆さんのおかげで、いい選挙ポスターに仕上がりました。今後もアリですね(笑)

レポすけ：おっと話が逸れまして(笑)すみません。選挙事務所の話でした。

津曲：その後も事務所担当のリーダーは決めましたが、私としては過去2回の選挙戦での経験からムリを欲しくないので、事務所担当がいらない日には、事務所は閉めるという事にしました。ところが、その状況をみかねてか、事務所担当をしてくれる方々が手を挙げてくれたんです。結果として3月10日に事務所開きを行い、その後9時〜17時、選挙期間中は、7時〜21時頃まで事務所を開けていたみたいです。

レポすけ：あ、最初は「閉める日」も予定にあったんですね(笑)



100人を越える方に来ていただいた事務所開き

津曲：「サロン」お褒めの言葉ですね(笑)

レポすけ：つ magari 事務所はレポすけも通ってましたが、選挙事務所というよりもサロンでしたものね。

津曲：「家内制手工業」↓「工業制手工業」へ、というものです。1期目はある種、創業期です。少人数で家庭的な雰囲気の中で始まったと思います。これが必要なのは今の私もありません。今は「く」なられてしまった方や、加齢とともに今回の選挙に参加できなかった方もいて、寂しい想いもあります。

レポすけ：おっと話が逸れまして(笑)すみません。選挙事務所の話でした。

津曲：「仕事」に人をはめるのではなく、人に「仕事、役割」

津曲：「仕事」に人をはめるのではなく、人に「仕事、役割」

津曲：「仕事」に人をはめるのではなく、人に「仕事、役割」

津曲：「仕事」に人をはめるのではなく、人に「仕事、役割」

津曲：「仕事」に人をはめるのではなく、人に「仕事、役割」

津曲：「仕事」に人をはめるのではなく、人に「仕事、役割」

津曲：「仕事」に人をはめるのではなく、人に「仕事、役割」

津曲：「仕事」に人をはめるのではなく、人に「仕事、役割」

津曲：「仕事」に人をはめるのではなく、人に「仕事、役割」

津曲：「仕事」に人をはめるのではなく、人に「仕事、役割」

津曲：「仕事」に人をはめるのではなく、人に「仕事、役割」

津曲：「仕事」に人をはめるのではなく、人に「仕事、役割」

津曲：「仕事」に人をはめるのではなく、人に「仕事、役割」

津曲：「仕事」に人をはめるのではなく、人に「仕事、役割」

津曲：「仕事」に人をはめるのではなく、人に「仕事、役割」

津曲：「仕事」に人をはめるのではなく、人に「仕事、役割」

津曲：「仕事」に人をはめるのではなく、人に「仕事、役割」

津曲：「仕事」に人をはめるのではなく、人に「仕事、役割」

津曲：「仕事」に人をはめるのではなく、人に「仕事、役割」

津曲：「仕事」に人をはめるのではなく、人に「仕事、役割」

津曲：「仕事」に人をはめるのではなく、人に「仕事、役割」

津曲：「仕事」に人をはめるのではなく、人に「仕事、役割」

津曲：「仕事」に人をはめるのではなく、人に「仕事、役割」

津曲：「仕事」に人をはめるのではなく、人に「仕事、役割」

津曲：「仕事」に人をはめるのではなく、人に「仕事、役割」

津曲：「仕事」に人をはめるのではなく、人に「仕事、役割」

津曲：「仕事」に人をはめるのではなく、人に「仕事、役割」

津曲：「仕事」に人をはめるのではなく、人に「仕事、役割」

3面から続く

でした。  
レポすけ：あ、この回答結果は「つまり俊明公式HP」でご覧いただけます。

津曲：ぬかりない宣伝ありがたうございます(笑)その結果を受けて、工夫をすればまだまだ、市民の皆さんは意見を言ってくれると感じたんですよ。そこで「工夫しよう」と思いSNSの強化に至ったのです。

幸い、WBBに強い同世代がアドバイザー&拡散を担ってくれました。市民アンケートのWBB活用成功经验があったので、正直、私には分からないアドバイスも素直に聞くことができたと思います。

これまではFacebookの発信をちょこちょこだけでしたが、「Twitterも毎日更新を心がけました。Youtubeも初めて挑戦しました。」

もちろん、リアルも含めて限られた時間の活動ですから、WBBアドバイザーの友人たちからすると私のSNS発信は30点くらいだったかもしれませぬ(笑)

レポすけ：いやいや。がんばって発信されてましたよ。

で、SNSを使った選挙戦について1期目や2期目と違った手ごたえは感じました？

津曲：そんなに簡単に「友達」「いいね」「登録者」は増えませんが「コメント」が急ににぎわっていてもありません。

ただ、私が早朝から駅立ちを準備しているところを、高校生が「朝から頑張っている」とツイートしてくれたのを、友人から見せてもらった時はうれしかったですね。

また知人からも「昨日は〇〇駅に立ってただね。SNS見

たよ」と言われると、コメントはしてなくても見てくれる人がいる、久々にあった知人友人ともSNSにアップしていただくから会話が生まれる、と言った良さを感じました。

おそろく多くの皆さんはSNSでもサイレントメッセージなどにも使っています。

レポすけ：特に日本人はその特性が強いですよ。本名、匿名に関わらず。

津曲：「いいね」も「コメント」もしないけど、スクロールしながらちょこちょこ見てくれる、というところですかね。

それは若い世代だけではありません。今や私たちのお父さんお母さんより上の世代の皆さんからも「見ているよ」という声がありました。

後はチームづまがりでも、なるべく本人以外が写真や動画を撮ってSNSで共有しようという動きもあり、チームの一体感をつくるのに一役も二役も買ったと思います。

レポすけ：候補者本人を含めたチームの動きをチームで共有することは、オンタイムで非常に役立ったと聞いています。レポすけは主にチームの外へ発信していましたが、大変な中でも和気あいあいと楽しく、そしてキメるとはキメて活動するチームの姿を、一人でも多くの方に知ってもらいたかったですよね。

津曲：おまけですが、Youtube大好きなうちの子供たち(小学生)がワクワクして私の動画を見たら「再生数が1けただったよ。お父さんやばくない」と真顔で言われました。今では笑い話です。

レポすけ：ユーチューバーは数

とってなんぼですからね。お子様が真顔で心配するお気持ちもわかります(笑)

津曲：SNSがすべてではありませんが、時間、空間、世代を越えて繋がる可能性を感じました。

レポすけ：その他、駅頭や街頭演説などで感じたことをお話しします。駅頭の後の豆大福はたまらぬ。とか。

津曲：11月から4月まで1年半の間断酒をしましたので、甘い物が恋しくなりましたね。豆大福にはお世話になりました(笑)豆大福、語りますか？

レポすけ：すみません。つい(笑)豆大福の話で盛り上がる前に軌道修正します(笑)

津曲：寒い冬のさなかに、多くのボランティアの皆さんに駅頭に一緒に立つてもらいました。立憲民主党公認の影響か、街頭で女性からの反応は極めて良かったです。一方で私のお父さん世代の方々が「絡んでくる」ケースが増えた気がします。残念なことですが、私ではなく女性や学生のボランティアさんに絡むんですよ。そういう場合は、私がすっと間に入ります。

おかしと思うところは大人げないかもしれませんが、反論します。

レポすけ：悲しいことに、ホントにいるんですよ。その手の方。

津曲：私が罵声を浴びせられることはありますが、毅然とした態度をとると、走り去っていくケースが多いです。おそろく票が欲しいだけだから何を言っても大丈夫なサンドバッグとも思っている人も、いるのかも

し

れませぬね 大人しいサンドバッグと思ったら口を開く人間だったわけだから、驚いて走り去っていくのもやむを得ないかもしれませぬ(笑)

レポすけ：反論を想定してなかったんでしょね。

津曲：選挙期間中になると、どうしても広報中心になります。私は駅頭や街頭活動の基盤は双方向コミュニケーション、対話だと思っています。

津曲：11月から4月まで1年半の間断酒をしましたので、甘い物が恋しくなりましたね。豆大福にはお世話になりました(笑)豆大福、語りますか？

レポすけ：すみません。つい(笑)豆大福の話で盛り上がる前に軌道修正します(笑)

津曲：寒い冬のさなかに、多くのボランティアの皆さんに駅頭に一緒に立つてもらいました。立憲民主党公認の影響か、街頭で女性からの反応は極めて良かったです。一方で私のお父さん世代の方々が「絡んでくる」ケースが増えた気がします。残念なことですが、私ではなく女性や学生のボランティアさんに絡むんですよ。そういう場合は、私がすっと間に入ります。

おかしと思うところは大人げないかもしれませんが、反論します。

レポすけ：悲しいことに、ホントにいるんですよ。その手の方。

津曲：私が罵声を浴びせられることはありますが、毅然とした態度をとると、走り去っていくケースが多いです。おそろく票が欲しいだけだから何を言っても大丈夫なサンドバッグとも思っている人も、いるのかも

し

「第一をモットーに右でも左でもなく前へ」を訴えました。

レポすけ：船橋市内でもいろいろな問題や課題がある中で、なぜ「障がいと子どもたち」にフォーカスしたのでしょうか？

津曲：大学生1年生の時のことです。学校近くでボランティア団体で障がいのある子と無の子が一緒に遊んで遊ぶ場に足を運びました。子ども達と遊び、接するボランティアを続けた経験が大きいです。母も現場の保育士として障がいのある子ども達と接していました。

私も恥ずかしいことですが、初めは偏見や違和感がありました。接していくと、小さな子ども達も、障がいのある人も、コミュニケーションの仕方が違うだけで同じ人間であり、考える想いは同じです。家族想いだったり、楽しいことは楽しい、嫌な事は嫌なんです。可能性は無限なんです。保護する対象ではなく、その可能性を相互に引き出し合っていきたいと思っています。

レポすけ：「障がいと子どもたち」についての政策は、1期目から訴えました。

津曲：障がいを抱える親族がいまないので、我田引水になってはいけないと思い、控えていた時期もありました。2期目からは障がい者雇用や福祉に関わる仲間との出会いの中で、当事者家族だからこそ発信するべきだ、との思いに変わりました。

津曲：障がい者雇用を例にとり「今人手不足が言われていますが、障がいのある人も、課題です。障がいのある人も適切にサポートすれば働ける人がたくさんいます。そして働きたい人、自分が自由に使えるお金が欲しい人もたくさんいます。障がい者雇用が進めば、障がいのある人も幸せになり、経済的な自立にもつながります。雇用者も人手不足が解消されます。社会保障費が浮けば、そのぶんをより重度の障がいの人に手厚くできます。」

レポすけ：なるほどわかりやすい。でも街頭で訴えるには長くないですかね。これ。

津曲：そのとおりです(笑)通り過ぎる人の目を引くには、分かり易いキーワードが必要なんです。「障がい者雇用の水増し」や「児童虐待と障がいの関係」などです。それから理念を伝えるようにしました。

津曲：ただ難しい側面があるん

です。例えば、建設会社の社長さんが道路整備を訴えたら、きつと利益誘導と言われる。教育や福祉だって同じことに陥る可能性はあるわけです。

レポすけ：ああ、こーゆうのがあるから政治ってのは、ややこしい。(苦笑)

津曲：大切なのは、個別利益を訴えるのではなくて、障がいのことをやるのが社会全体の利益になる、という「広がり」を意識しました。

レポすけ：ほほう。広がり、ですか。

津曲：障がい者雇用を例にとり「今人手不足が言われていますが、障がいのある人も、課題です。障がいのある人も適切にサポートすれば働ける人がたくさんいます。そして働きたい人、自分が自由に使えるお金が欲しい人もたくさんいます。障がい者雇用が進めば、障がいのある人も幸せになり、経済的な自立にもつながります。雇用者も人手不足が解消されます。社会保障費が浮けば、そのぶんをより重度の障がいの人に手厚くできます。」

レポすけ：なるほどわかりやすい。でも街頭で訴えるには長くないですかね。これ。

津曲：そのとおりです(笑)通り過ぎる人の目を引くには、分かり易いキーワードが必要なんです。「障がい者雇用の水増し」や「児童虐待と障がいの関係」などです。それから理念を伝えるようにしました。

津曲：ただ難しい側面があるん

です。例えば、建設会社の社長さんが道路整備を訴えたら、きつと利益誘導と言われる。教育や福祉だって同じことに陥る可能性はあるわけです。

し

の合わせ技も重要、ということですね。耳に訴えるというか。

津曲：これはボランティアさんとマイクリレーをする中で、とあるボラさんの言葉をパクらせていただいたのですが、「障がいのある人もない人も、共に暮らし、共に学び、共に働けるまちを、社会をつくらう」というものです。

レポすけ：パクらせて(笑)まさに街頭演説も、チームづまがりですね。

津曲：私は街頭演説のマイクリレーを通して、訴えがフュージョンしていくと思っています。

レポすけ：ほー。その心は？

津曲：松下幸之助さんの言葉に「生成発展」というものがあります。万物は常に変わり発展をしていくものであるという意味です。有権者の気持ちも日々変わるものであれば、こちらも理念の軸はぶらさずに、でも伝え方は変えていくのは当然だと思います。

レポすけ：「理念の軸はぶらさずに」という所がポイントですね。そこまで変わっちゃったらブレブレの政治家になってしまう。

津曲：それから普段から駅に立っている、実は多くの障がいのある方々に話しかけてもらえます。素直な心の持ち主が多いのです。障がい者雇用のことを訴えていると、そっと精神障がいの手帳を見せながら、にっこりされたこともあります。

船橋の人口64万人のうち、障がいのある人は3万人とも言われています。ご両親が健在であれば9万人。実に市民の7人に1人が、当事者あるいは近い

い

選挙戦最終日の街頭活動



ご家族です。

レポすけ：そう考えると、障がいのことは非常に身近なことなんです。

津曲：でも私達の社会の中ではなぜか見えない、「いなり」とことになっていませんか？と私は訴えたいのです。ロンドンで職人の修行をしていたある友人が言っていました。「まさに当たり前になりすぎて障がいのある人と出会う。日本はまだまだですよ。」

差別や偏見は、人への憎悪よりも「知らない」ことから始まると思います。「愛の反対は無関心」という言葉もあります。その通りだと思います。柔軟な心を持つ子どもの時からお互いが知り合えば、世の中の多くの差別や偏見は消えていくのではないのでしょうか。

レポすけ：ごもっとも。知らないことによって、本質を見ようともせず、差別的潮流に乗ったり、知ろうとしないことが当たり前になって、見えない分厚い壁を作ることになりかねません。「悲しいけれど、これが現

在

実

**4面から続く**  
 実なよね」なんてあきらめる前に、津曲さんが政治家として何か打つ手はあるのでしょうか。

津曲：具体的な政策としては、特別支援学級を全ての小中学校にと訴えました。知的障がい、自閉情緒障がい、学習障がい、聴覚障がいなどを抱えている子ども達を支援するための多様な場が必要です。その子の特性に応じて、船橋市では市立特別支援学校、地域の小中学校内の特別支援学級、そして普通教室に通いながら通級指導を受ける通級指導教室があります。

レポすけ：お、意外と細かくカテゴライズされているんですね。

津曲：政令市以外で特別支援学校を市立で持っているところは少なく、本市の誇りでもありません。

レポすけ：市でそのようサポート体制があると、親御さんも安心ですね！

津曲：一方で特別支援学級については、遅れが見られます。まだ半分の小中学校にしか、特別支援学級が設置されていない。結果、特別支援学級に通う半分の子ども達は、学区外から通うという負担があります。

レポすけ：え、そんなんですか。全部の学校にあるもんだと思いましたが。

津曲：こんな事もありました。午前中公園の前に宣伝カーを止めて、障がいと子どものことを訴え、ある親子のもとにうまくリポートを渡しに行きました。

「この子は知的な障がいがあるから、自身を振り返る時に、確かに、自身を振り返る時に、

ります。特別支援学校に通わせようと思うのですが遠いんですよ。」お迎えの巡回バスを市では用意していますが、親御さんの心配や地域でのつながりを考えれば、地域の小学校の支援学級で学べるという選択肢もあっているべきではないでしょうか。また近年インクルーシブ教育ということが言われています。障がいのある子どもと一緒にいると、障がいのない子どもたちはより優しくなれると思います。多くの親御さんたちは、優しい子に育てたいと思っているのではないのでしょうか。

レポすけ：あーそれ知ってます！ インクルーシブ教育って「子どもたち一人ひとりが多様であることを前提に、障がいの有無にかかわらず、誰もが望めば自分にあった配慮を受けながら地域の学校で学べることを目指す」ということですよ。

津曲：そうですね。そのことです。

レポすけ：この考えがもっと広がるといいなと、レポすけも思っていました。

そんな多様性のある社会を目指す公約を実現するために、いましている事、取り掛かる事、やってみたい事など現在の津曲さんが「何をしている」のかを教えてください。

津曲：障がい者雇用を行っている企業さんから、「障がいの特性を活かすことは大切であるが、それ以上にこれまでの成育歴、小さい時に集団で過ごすことが、働き続けるために大切」と言われたことがあります。今小さい時の教育の重要性が言われていますが、それは障がいのある子どもにも同様です。

レポすけ：教育の過程、ですか。確かに、自身を振り返る時に、

子ども時代の経験って必ず思い出しますし、その時何を体験したのかによって、今の自分に活かされている、っての、結構ありますからね。

津曲：6月の議会では「特別支援教育のうち特別支援学級」について、取り上げました。全国的には全校設置の方向なのになぜ本市は半分なのか、他市の動向は把握しているのか、増やしていくスピードがゆっくりなのはなぜなのか、といった内容です。

レポすけ：その質問、レポすけも「船橋市議会HP」の議会質問の録音中継で余す事なく見ました。あ、記録は残っていますのでなだでもご覧いただけます。

津曲：またしてもさりげない宣伝(笑)

その時、意識したのは議員、そして教育委員会以外の他の部署の市の幹部との課題の共有です。教育委員会の担当課の方には、残念ながらかなり嫌がられたのではないのでしょうか。

レポすけ：役所側に嫌がられると、後々やりづらくなったりするんじゃないですか？

津曲：議員は時に役所に嫌がられても、逆に市民に嫌がられても、訴えなければいけないことがあります。役所も市民も私も時に間違えます。人間がやる事ですから。そしてそれは誰かに指摘されて初めて気付きます。私は市民から指摘を受けますが、行政には無謬性(誤りが無い)という前提があり、なかなか軌道修正できない。それを議員に指摘されることで変えやすくなるのです。

レポすけ：なるほど。議員さん

の役割にはそんな側面もあるのですね。

津曲：私も行政の中にいたから分かります。「市長与党」だから役所に文句いふな、など言っている地方議員さんが未だにいます。二元代表制や政治の役割をどう考えているのでしょうかと心配になります。

レポすけ：「市長与党」(笑)それで役所の変化はありませんか。今の現況を今後はどう進めていくのでしょうか？

津曲：目に見えた変化は、すぐには起きません。ただ担当部署には、4年間この分野は取り上げますよ、とお伝えしておきました。追及一辺倒の北風ではうまくいきませんので、例えば発着障がいやグレーゾーンの子どもたちを受け入れる特別支援学級があれば、学校運営上もスムーズですよと訴えますし、必要な予算があれば財政当局と一緒に働きかけましょう、とも言っています。そして現場の先生がどう感じているのか、また福祉系の大学教授など専門家はどうか考えているのか、私のまわりの市民はどうか感じているのか、キャッチボールも進めています。

レポすけ：まさに「北風」と「太陽」(笑) 追及して「敵」を作るとは、協調して周りを巻き込んでいく。それもまた多様性のあるべき姿、といったところでしょうか。

津曲：自分が望むか望まぬかではなく、期待に応えていくというのも大切なことかと思えます。それから議員としてでもありませんし、簡単な事でもありませんが、障がい者グループホームや、虐待を受けた子ども達を受け入れるファミリーホーム

レポすけ：なるほど。議員さん

た」とのことでした。

本市は保護者から要望が出てこないというところなので、どうか、と見られがちですが、そうではなく、障がいのある子どもを抱えた保護者の方は、申し訳ないとか面倒を見ていたたいてありがたいと言った気持ちが強いんです。

レポすけ：「声」はあるんですね。

津曲：なかなか声を上げにくい環境にある、というのが現状かと思えます。その声をしっかりと掘り下げていきたいです。特別支援学級を担えるスキルを持った教職員が少ないという課題はあるのですが、先行する千葉市では、この夏も多くの教職員の方を大学で研修させています。誰かが悪いとか、できない理由を考えるのではなく、できるためにはどうすれば良いのか、子ども達にとってベターなことは何なのか、を追い求めていきたいと思えます。

レポすけ：政策以外に、今後、津曲さんがやってみたい、挑戦したいと思うことはありますか。

津曲：せっかく今回、6976票、60人中2番目として当選させていたかったですので、より大きな選挙を狙っていききたいと、公言していきたく思っています。

レポすけ：おお！「津曲、大きな選挙目指すってよ」ですね！

津曲：自分が望むか望まぬかではなく、期待に応えていくというのも大切なことかと思えます。それから議員としてでもありませんし、簡単な事でもありませんが、障がい者グループホームや、虐待を受けた子ども達を受け入れるファミリーホーム

レポすけ：なるほど。議員さん

など、福祉事業そのものをやりたい夢があります。そのためには現場の経験を積みたいてすし、社会福祉士の資格取得にもチャレンジしたいです。

レポすけ：「声」はあるんですね。

津曲：同じ市議の皆さんでも、社会福祉士の資格を取っている方もいて頭が下がります。地域のご相談事は介護、医療、子育て、障がい、生活困窮と多種多様な福祉であり、家族問題でもありません。これをしっかりと受け止めるためにも、ソーシャルワークの技量を高める必要性を感じます。

今は自治会、商店会、青少年相談員、地区社会福祉協議会と求められるがままに役員をやっています。これらは現場の声、地域の声を感じ市政に反映するためでもあります。少々忙しいと思いますが、少々忙しい

レポすけ：政策以外に、今後、津曲さんがやってみたい、挑戦したいと思うことはありますか。

津曲：せっかく今回、6976票、60人中2番目として当選させていたかったですので、より大きな選挙を狙っていききたいと、公言していきたく思っています。

レポすけ：おお！「津曲、大きな選挙目指すってよ」ですね！

津曲：自分が望むか望まぬかではなく、期待に応えていくというのも大切なことかと思えます。それから議員としてでもありませんし、簡単な事でもありませんが、障がい者グループホームや、虐待を受けた子ども達を受け入れるファミリーホーム

レポすけ：なるほど。議員さん

過ぎるかなとも思っています。船橋市議会では近隣市に比べても議会も長く、活発です。政党活動も支えなくてはいただけません。また遊んでくれる小学生の子ども達との家族の時間も大切にしたい…。

現状、まだまだ取り組めていません。自分自身もできない理由をならべるのではなく、できるためにはどうすれば良いのか、考えなくてはですね(笑)

レポすけ：津曲さん、選挙期間中仰ってたじゃないですか。できるできないじゃなく『頑張るしかない！』って。坊ちゃんのお言葉でしたっけ？ その言葉があればイケますって。やれまして(笑)

津曲：いや〜(苦笑) 自分自身の時間の使い方優先順位を付けられないのに、限られた財源でどこに重点的に投資していくべきなのかと言っても、説得力

レポすけ：政策以外に、今後、津曲さんがやってみたい、挑戦したいと思うことはありますか。

津曲：せっかく今回、6976票、60人中2番目として当選させていたかったですので、より大きな選挙を狙っていききたいと、公言していきたく思っています。

レポすけ：おお！「津曲、大きな選挙目指すってよ」ですね！

津曲：自分が望むか望まぬかではなく、期待に応えていくというのも大切なことかと思えます。それから議員としてでもありませんし、簡単な事でもありませんが、障がい者グループホームや、虐待を受けた子ども達を受け入れるファミリーホーム

レポすけ：なるほど。議員さん

がありませんよ。でも、やるからには自分の時間の使い方を棚卸しし、今何が必要で何が必要でないのか、しっかりと整理をして新たなことに時間の投資をしていきたいと思えます。私自身の働き方改革も必要ですね。

レポすけ：そうですね！ ずいぶん長々と語っていただきましたが、チームつまがりは、これからは津曲さんの政治活動のサポート、応援、そしてツツコミをしていきますからね。全員、背後でハリセンもって(笑)

2年後、3年後、そして次の選挙も視野に入れ、今後もHPなどで「政治家 津曲俊明」の活動を追っかけます！

42歳 3期目  
 会派 8名

レポすけ：政策以外に、今後、津曲さんがやってみたい、挑戦したいと思うことはありますか。

津曲：せっかく今回、6976票、60人中2番目として当選させていたかったですので、より大きな選挙を狙っていききたいと、公言していきたく思っています。

レポすけ：おお！「津曲、大きな選挙目指すってよ」ですね！

津曲：自分が望むか望まぬかではなく、期待に応えていくというのも大切なことかと思えます。それから議員としてでもありませんし、簡単な事でもありませんが、障がい者グループホームや、虐待を受けた子ども達を受け入れるファミリーホーム

レポすけ：なるほど。議員さん

一灯照隅 第一七六回

市議選・参院選を振り返って  
 今後の立憲民主党の課題

大野まさき(多摩市議会議員・会員)

自身の選挙を控えながらも敗れて他地区の選挙に関わった訳  
 私は今年4月の統一自治体議員選挙時の選挙を含め、武蔵野市議選に4回(4回目は落選)、多摩市議選に4回(1回目は補欠選挙)、自身が候補者となる選挙経験がある。かつても自身の選挙直前の統一選前半戦、事前の政治活動や選挙本番のお手伝いを行うことが全く無かった訳ではないが、今回の市議選は、他の選挙に主体的に関わり、並行して自身の選挙を準備するという経験はこれまでになかった。

今回なぜ自身の選挙を控えながら、それ程他人の選挙に主体的に関わることとなったのか。それは政治活動や選挙運動のノウハウを丁寧に実地で教える存在が他になかなかいなかったからである。

松戸市議選

まず、昨年11月に行われた松戸市議選への取り組みを挙げたい。新人候補で背景に大きな支援組織がない新人の岡本ゆうこさん(現松戸市議)の支援を、

**5面から続く**  
私は全面的に行った。選挙本番中は寝袋持参で事務所に泊まり込み、選挙戦を支える役目まで担った。

岡本さんはこれまで非正規の労働者として働き、親の介護も経験。また不妊治療を受けてきたものの、近隣市間でも在住市が変わるとその補助のあり方が変わってしまうこと等、自身の体験を通じて感じた行政の課題や、原発問題など政治のあり方そのものについても大きな疑問を抱いていたことがきっかけで、立候補を決意した人物。

しかし選挙本番3ヶ月前の昨年8月に、「どう選挙に取り組んで良いかわからない。活動の仕方を教えてくれる人がいない」という悩みがSNSを通じて東田市議に伝わり、私は東さんから「誰か岡本さんの活動を手伝える人を知りませんか？」と相談を受けたことがきっかけで、私自身が一度会って話を聞いてみようということになった。

お会いした結果、まず私が松戸に入って政治活動の仕方を教えることが必要と判断した。実は当初、やり方を多少直接教えたら、後は御役御免で自身の活動に戻るつもりでいた。しかし、言われたことをきちんと実践するなど、彼女の活動に対する取り組み姿勢が必死で意欲的であったこと、彼女の政治活動を応援したいという人たちが、SNSを通じて地域外であってもあちこちうちにも拡がっているという現象もあったことが、私を岡本さんの活動ヘルプに繋ぎ止めることとなった。

立憲民主党が「枝野立て〜」と国民に押されて出来た政党であったこともあり、これまで政治活動に関わったことが無い普通の市民が政治に興味・関心を持ち、特に立憲民主党の取り組みを応援しようという人たちが

とって、市議選とは言え、立憲民主党頑張れ！の思いが岡本さんへの声援にもなった。私に對しても「岡本さんのことをよろしく」というメッセージが寄せられ、簡単に私が手を引く訳にはいかない状況となっていた。「草の根からの民主主義」を掲げる立憲民主党が、特定の背景や組織のバックアップが無い人でもきちんと勝てることを実証することが、私の使命に思えてきた。

松戸市議選では立憲民主党公認候補4人全員が当選したが、岡本さんの場合、立憲民主党の公認以外、地域での背景や支援してくれる団体のバック無しに活動を進め、当初準備を始めた地区も、他の同党仲間と地区が被ってしまったことから途中で移し、新たに活動を始めたハンデイもあった。しかし一時は危ぶまれていた活動の立て直しに成功し、特定の団体やしがらみをあてにせずとも、一般の市民に向かって政治活動を行うことで当選に繋がったのである。

**川崎市議選（宮前区）**

次に私の関わりで挙げたいのは、4月の統一選の前半戦の川崎市宮前区で、新人の立憲民主党公認市議候補者だったふじなが忠さんへのヘルプである。残念ながら、ふじながさんの選挙結果は約1500票差の次点で惜敗。この選挙の取り組みについては大変悔いが残ることになってしまった。

岡本さんの当選を成功体験として、自身の選挙準備にも弾みを付けて取り組まなければならぬ中、他地区の活動ヘルプにも熱心な私の地域の立憲パートナーの方から、ふじながさんの政治活動をきちんとサポートできる人がいないため困っているようだ、という話を聞いた。ふじながさんは補聴器を使用しても片耳が全く聴こえない

聴覚障がい者。障がいを持つ立場、社会的に弱い立場にある人こそ政治の光を当てていくべきと考え、立候補を決意。実際に私がふじながさんにお会いしたのは、川崎市の選挙本番直前の2月頃であった。

思っていた通り、本来やるべき政治活動の取り組みが不十分ではないかと、本人も感じていたとのこと。駅頭でのアピール活動はなされていた一方、政令指定都市の市議予定候補者となったものの、初めての選挙立候補にも関わらず、その役割と規模に見合うサポート体制が党として殆ど無く、事務作業を含め、ほぼ本人のみで手探り状態で準備を進めなければならぬ状態に置かれていることがわかった。

政治活動として地区内の仕方を演説して回ってみることを、私は提案した。仕立のやり方や場所選定のポイントを直接実地でアドバイスする必要もあって、自身の予定の合間を縫って、何度か宮前区に私も足を運んだ。ふじながさんのコソの呑み込みは早く、実際に仕立ちを始めて、効果を本人も実感したようだった。

しかし、ふじながさんへのヘルプ活動については、もしももう少し早い段階から関わることができていたら、当選に繋がっていたかもしれない。もっと事前の政治活動の段階で、区内でのきめの細かい仕立ちがコンパクトにできていたならば、私自身が選挙本番でもっと現場に入ることもできていたならば、等悔いの思いが溢れてしまう。

**多摩市議選**

4月の統一選の後半戦は、私自身の選挙。直前にも関わらず自身の政治活動だけに専念しなかったこと、草の根からの民主主義を自身でも実践すべく、連合推薦を今回は求めなかったこと

と等、得票にとってはマイナス面と思われれることを敢えて押し通したまま選挙に突入した。多摩市議選で立憲民主党は私の他に元職のしらす満さんも公認して、何とか立憲民主党は複数候補を立てて選挙に臨むことができ、私としらたさんは定数26人中仲良く6位・7位と並んで当選することができた。

直前のふじながさんの選挙で結果を出すことができなかったことが、私自身を奮い立たせたのと、同党仲間しらすさんと共に選挙に臨むこととなったことが起爆剤になった。また、選挙を一人で抱え込みます、これまでに私が選挙応援した他地区の皆さんや、地域の支援者にも来ていたたいて、チームで取り組む選挙をしようとしたことが、良い結果を生むことにもつながったと思う。

また選挙本番中に、まさかの枝野代表の多摩市入りの応援もあり、多くの人が駆けつけた。上記の岡本松戸市議がほぼ連日私の選挙にも駆けつけ、枝野代表にもその姿が写って「指示を出した訳でないにも関わらず、自分たちの意思で地域を超えた連携を取って立憲民主党の活動を展開してくれている」といった趣旨の内容が、枝野代表の話で語られたことが印象深かった。まさしく私がこの党で実現したい姿の理想形を党代表にも示すことにも成功した。

**参院選**

5月の後半になって、ようやく立憲民主党の参院選東京選挙区の2人目の候補者が、元朝日新聞社記者の山岸一生さんに決まった。既に同地区候補者として決まっていた塩村あやかさんに大きく出遅れての出馬表明となったが、選対本部長が菅直人衆議、事務局長に川名武蔵野市議となり、私も擁立決定直後から選対メンバーの一人として

事前の政治活動としての宣伝力ー運行計画案作成等の作業を担当することとなった。

自治体議員はちょうど6月議会前後の時期とも重なり、他議員のヘルプを求めても、なかなか一緒に手伝ってもらえず、数少ない他スタッフと共に私自身も忙殺されることとなった。

山岸さんの選挙は、多くのボランティア、立憲パートナー、無所属や他の勢力で活動する地方議員等が入って支えていた。ある意味、立憲民主党は理想とすべきスタイルを実践していた

選挙とも言えた。

しかし、この選挙も最後に一歩及ばず惜敗。「もっと早い段階で活動を開始していたら勝たのでは？」とたえ事前の準備期間が短かったとしても、方針と体制がきちんとしていたら勝たせることはできたのではないかと。といった多くの人たちから悔いる話が寄せられた。山岸選対のみならず、負けてしまった比例区候補に対しても、党としてのサポートや方針が整理されていなかったことが、敗因であると私も感じる。

**課題**

本来なら結党以来、立憲民主党がやらなければならない「ポトムアップ」の取り組み、組織に関係ない普通の市民に向けての姿勢というものが、ある意味宙ふらりんのまま、統一地方選挙院選に取り組んでいってしまつたことを見つめ直す必要があると思う。その分を新しい新選組にさらわれた感もある。立憲が受け皿としては認められていないことを、旧民主党的な勢力の再結集ということで対応しよ

うとするのでは、さらに普通の市民からどうぼを向かってしまつたことにならないか、草の根からの民主主義に反しないか、大変危惧をしている。出来る地域からだけでも、見える形での党活動や運営、政策反映におけるポトムアップを実践してみる。ことから始めるべきであると、私は考える。

4期目 51歳  
党派 4名

**選挙から自治を考える**

「がんばろう、日本！」国民協議会 第九回大会 第一回総会 問題提起

■本年一月に開催された「がんばろう、日本！」国民協議会第九回大会では、本格的な人口減少時代・縮退社会に必要な自治の当事者性をどう準備するかという問題設定から、選挙を数で「決着つける場」ではなく、課題を共有する場へと転換すること、その試みとして統一地方選をたたかうことを呼びかけた。8月4日の第一回総会はこの方針から統一地方選、参院選を総括するともに、483号で提起した「ポスト安倍政治」の問題設定と、その「担い手」について議論した。以下は、江藤俊昭・山梨学院大学教授の問題提起と、戸田代表の提起、各地の報告の要旨。

**低投票率、「なり手不足」の背景  
〜非政治・反政治の構造**

まずなぜ低投票率なのか、政治に関心がなくなってきたのか、ということについて、「非政治」「反政治」というキーワードから、私なりに考えていることをお話しします。

「非政治」というのは「脱政治」と言ってもいいと思います。新自由主義の流れの中で、自己責任という風潮がどんどん出てきて、政治で世の中を動かしていくより、自分たちの生活を守っていくほう

が大事なんだということになると、政治についてほとんど関心がなくなる。政治を委ねるといって、順位としては、なんと下がってきてしまつた。そういう「非政治」が蔓延してきているのではないかと感じています。

もう一つの「反政治」ということは簡単に言えば、ここまで格差が拡大していく中で、普通の人たちの生活が厳しくなると、税金で食っているような人たち

**江藤俊昭・山梨学院大学教授**

公務員や議員に対する批判が広がって、これが「反政治」だと思います。特権とか既得権とか言いますが、右も左も既存の政党も含めて批判の対象になる。それがヨーロッパではポピュリズムの流れにつながっていく、ということだと思います。

それらが相互に関連しながら、政治について一方での無関心、他方では極端に批判的になってくるのではないかと。こうした流れが結果として投票率の低下にも現れている、時にはN国党とか、れいわ新選組——N国党と、れいわ新選組はかなり違うと思いますが——というように、右でも左でもない動きにもなったりする。

それからもう一つ、地方政治は台頭してきているはずなのに、負の連鎖が続いているのではないかと、感じています。

分権改革の中で地域経営の重要度が高まっている、あるいは財政危機による選択と集中——「あれもこれも」から「あれかこれか」というように、地方政治が重要になってきている。にもかかわらず政治、行政への不信

6面から続く

の連鎖が広がっていると思えます。特に議会は、解決が困難な課題に直面して責任はますます重くなるのですが、追認機関化している従来の議会では対応できない。だから「こんなものならいい」ということになるのかもしれない。

住民から言えば、身近な課題を地方議会や首長にぶつけても、従来の議会ではそれに答えられない。そもそも議会運営が見えない。課題に答えられない議会なら、その設置の意義が失われる。そこで議員定数や報酬の削減要求に結びつくといいことではないか。新たな課題を解決するための時間と努力の負担が増すにもかかわらず、こうした負の連鎖によってコスト削減要求が高まっている。

さらには「尊敬されず」と。全国町村議会議長会が今から十年ほど前に、全地方議員にアンケートを取りました。その時の「公憤」のトップスリーの中に「尊敬されない」ということが入っている。私は正直びっくりしました。

地域の課題が解決できない、報酬が低い、というのはわかるのですが、三番目に「住民から尊敬されていない」と。いくら大変でも、尊敬されていれば動けると思うのですが、「尊敬されていない」ということでは、やりがいも欠如する。そうするとますます魅力がなくなっ

て、立候補者が少なくなり、議員属性が偏り、その結果新たな課題の解決が困難になって、さらに住民の不信が蔓延してゆく。こうした負の連鎖にどうやって突破口を開けるか。



江藤俊昭 (えとう としあき)

山梨学院大学教授

1956年生まれ。中央大学大学院博士課程満期退学。博士(政治学)。第29次、30次地方制度調査会委員などを歴任。「自治体議会学—議会改革の実践手法」(ぎょうせい)など、著書、論文多数。議員力検定協会共同代表。

これまでに負の連鎖がかなり続いてきているわけですが、ようやく議会改革を進めながら報酬を上げる議会も出始めてきている。ある程度自信を持ちながら、住民に訴えかけながら、という状況だと思えます。

投票率の低下とともに、小規模議会では「なり手不足」問題が深刻です。さらに言えば、無投票当選はもはや小規模議会だけではありません。首都圏の県議会でも、無投票当選のところがでてきています。また首長選挙でも、町村では無投票が四〇パーセントを超えている。市長選挙でも、三〇パーセントくらいが無投票ではなかったかと思えます。

そうすると、本心に民主主義といえるのかとも思えます。横道にそれますが、選挙がないのは民主主義にとって問題だということでは、一般的に確かにそうです。もっと具体的に言うと、選挙がないことによって、事前のチェックも事後のチェックも効かないということになります。

無投票では選挙時の公約も出ませんから、政策論議ができなくなる。そして選挙がないということは、固定化してしまう。多様性に基づいて政策を巡って議論をすることが、議会の存在意義だと思えます。多様性が大事なんです。無投票によってそれが失われてしまう。無投票というのは、大きな問題だと思えます。なり手不足や無投票当選が続くことは、その地域の活性化にはつながらないと思えます。

シビル・ミニマムの変遷と

市民の政治的関心・投票率の変化

話を戻します。ここまでは、政治的な関心が希薄化する、あるいは投票率が低下する社会構造を見てきました。では投票率が高かった時代はいつ頃でしょうか。統一地方選挙の投票率をみると、一九四七年が七〇パーセントくらいです。戦後最初の選挙です。次の五一年で九〇パーセント近くに上がっています。これはおそらく戦犯が公職追放から復活して戻ってくる時期ですね。

その頃は、リコールの最初の波でもあります。例えば名望家の方々が、今の議員を「成り上がり者だ」とリコール運動をする。それで昔の名望家に戻ってくるというように、激しい対立がある。農民運動とか労働運動の高揚もあると思います。そういう流れで投票率が九〇パーセント近くになる。ただそれ以降はずっと下がっています。

ついでに言うと、直接請求の波はその頃が一つで、次は六〇年代、七〇年代の高度経済成長期に、公害防止条例を作ろうなどという形で起こります。続いて二〇〇〇年代には、市町村合併に関する住民投票条例の直接請求が、もう一つの波として現れます。

統一地方選挙の投票率に話を戻すと、今言ったように、一九五一年を頂点として右肩下がりになります。ただし、一九六〇年代から七〇年代にかけては、どこかの地方選挙も下がらない。場合によっては上がっているところもあります。

なぜかという点、高度経済成長の中で公害や環境破壊に対する運動や、社会資本の整備を求める運動——「ポストの数ほど保育園を」という運動もありました——があったからです。そういう形で住民運動が高揚し、それに基づいて革新自治体が台頭してきます。

いわゆる保守と革新との対立の中で、大都市の多くが革新自治体になる。東京であれば美濃部都知事もそうですし、中

央線沿線も多くのところが革新自治体になった。保守と革新という対抗軸があり、また住民運動がありということ。市民も政治に関心を持っていくということになります。

そこで一九六〇年代、七〇年代をどう見るか、またそれ以降、投票率の低下が進んできたことを、シビル・ミニマムの変遷ということから考えてみたいと思います。

一九六〇年代、七〇年代に、シビル・ミニマムという社会資本の充実に求める運動があったわけですが、それがある程度達成された後、その運動は止まってしまふということがひとつ。そして今度はシビル・オプティマムという局面になる。社会資本の適正な(オプティマム)水準は人によって違いますから、最低水準以上のもは「お金を出して個々人でやっ

てくれ」という話になってくるわけです。そうすると政治というよりは、私生活ということになる。また市民についても、そうしたものを現実にいく主体としてではなく、公共サービスの対象として描いていくような議論になってきます。

仮にこうしたシビル・ミニマムの変遷をヒントとするなら、それに代わる新しいものは一体何なのか。私は「新シビル・ミニマム」という言い方をしています。シビル・ミニマムというのは、松下圭一という法政大学の政治学の先生が作り出した和製英語です。イメージとして、ナショナル・ミニマムというのは社会保障で言うと、生活保護のような国民としての最低限の保障ですが、シビル・ミニマムというのは「市民の生活権であり、自治体の政策の公準である」と、難しい言い方をしていますが、社会保障・社会資本・社会保険の総合システムを数値化していくということです。

その自治体における「政策の公準」、例えば上下水道の普及率とか、公園はどの

くらい必要かといったことは、ある程度科学的に決められるのではないかと、とも考えられるのですが、しかしよくよく読むと、それは自然科学的に設定されているわけではなくて、市民参加とか熟議によって達成するものであると、松下さんは言っている。市民参加を強調する松下圭一にとっては、市民の参加の中で、社会資本、シビル・ミニマムを作り出していくと言っていたわけです。

これを受けてICUの千葉先生は『ラディカル・デモクラシー』という文献の中で、「シビル・ミニマムは」公共部門の総合化を可能にし、しかも市民間の自発的な討議や熟議や参加を機軸にして、下からの政策形成の可能性を切り開いた」といっています。

代表的なのは、美濃部革新都政の二期目を目指した「広場と青空の東京構想」という総合計画です。広場というのは市民参加、青空というのは公害に対する対応です。今みても、素晴らしいネーミングだなと思います。

こういうものとシビル・ミニマムがつながりながら、革新自治体が形成された。もちろん革新自治体がすべて正しいわけではなく、いろいろな問題を抱えていたのも事実です。あるいは本当に自治を担っていかのか、国政のための手段だったのではないかと、という議論もありました。

新シビル・ミニマムが問われる

それでは今後、どのように反転できるのか。結論を言えば、白川さんが言われていたような(日本再生)483号「一灯照隅」、縮小社会においてどこまで削減できるのか、あるいは何かを維持するために負担を増やすというように、新しい課題を打ち出して討議空間を作り出していくことが大事だと思います。そういう意味でも一度、シビル・ミニマムというものを考えていきたいと思います。

レジュメには「新シビル・ミニマム」と書きましました。シビル・ミニマムというの

ただ一九六〇年、一九七〇年代の社会資本充実運動、シビル・ミニマムの充実運動のなかで政治への関心が高まり、投票率が上昇してきたのではないかとというのが、私の仮説です。

では、それ以降どうなったか。一九七〇年代後半から八〇年代にかけて、革新自治体の数は急激に減っていきます。背景には社会党と公明党の合意があったり、いわゆる「総与覚化」といわれる政治状況があります。

ただもう少し見てみると、シビル・ミニマムがある程度達成されると、今度はシビル・オプティマムという局面に入る。社会資本の適正基準は人によって違います。またそれを税金で賄うかどうか、という問題もでてきます。

そこで最低のところは行政がやるが、それ以外のところは個々人にゆだねていく。あるいは行政サービスについても、行政がすべて担うのではなく、民間への委託等が行われます。これによって人々の関心も、政治の重要性より社会や経済へとシフトすることになると思っています。

こうした流れの中で、政治への関心が希薄になっていく。それに伴って投票率が下降していく、という状況ではないか。投票率の低下は、こうした構造変化の結果ではないかと思えます。

は社会保障、社会資本、社会保険という三つの要素によって構成されていますが、当時とは異なる環境があるということです。

一つは縮小社会の環境です。拡大志向から縮小への転換であり、その環境におけるシビル・ミニマムを探ること。どこまで削れるのか、最低限どこまでは保証しなければならないのか、といったことです。

もう一つの環境変化は、公共サービス

|                           |   |
|---------------------------|---|
| シビル・ミニマム (1960年代～1970年代)  | 社会資本充実運動<br>【政治への関心増加・行政への市民参加→住民の政治的関心向上 (投票率上昇)】<br>*革新自治体の台頭   |
| 脱シビル・ミニマム (1980年代～2000年代) | シビル・ミニマム達成 (社会資本の「充実」)<br>・シビルオブティマム→合意の困難性<br>・民間へ→公的空間の問題からの離脱<br>【政治への関心希薄・行政改革 (民間委託等)→住民の政治的関心減少 (投票率下降)】<br>*「総与党化」 |
| 新シビル・ミニマム (2010年代)        | シビル・ミニマムが問われる (公共施設の統廃合) →?? (合意形成による住民自治、非合意による住民間対立の激化か)<br>【政治への関心増加・議会や行政への住民参加→住民の政治的関心向上 (投票率上昇)か?】<br>*新たなアクター?    |

7面から続く

の供給主体の多様化です。当該自治体はもとより、住民参加、協働によって住民NPO、企業が関わっている。自治体間連携も行われるようになる。そのなかで当該自治体の役割は、どこまでそのサービスを提供することなのか、あるいは自治体と議員と住民がどう関係を取り結んでいくか。こうしたことについて決めていかなければいけない。まさに「決める」ことが浮上しています。これは政治です。

こうした問題設定をしっかりと出すこと、そしてその討議空間を作ること。これは市民にも自治体にも課せられていると思います。

このなかで議会がどういう役割を果たすか。

新シビル・ミニマムは「住民参加と討議による公準」であるがゆえに、住民間

での討議が不可欠だということ。「公開と討議」を存在意義とする議会は、まさにこれを担うことになり得ます。住民間で議論を巻き起こすことともに、議会としてもしっかりと議論することです。

もう一つは、縮小社会の公準がシビル・ミニマムですから、拡大志向の口利きはもうできない、という議員の自覚です。もちろん、それぞれの地域の課題を聞くことは大事です。ただそれは別に議員に言わなくても、行政にあげられる。そういうルートはできてきているわけです。

だからそればかりやっている議員はダメだろうということ、「逆口利き」というか、できない理由をちゃんと説明しなければいけないでしょう。そのことで市民は真剣にその地域のあり方、自治体のあり方、サービスのあり方を議論できるわけです。

二〇一〇年代以降は、そういう新シビル・ミニマムの議論をしたいということ。公共施設の統廃合、合意形成による住民自治、非合意による住民間対立の激化など書いてありますが、今後どういう形で踏み込むことができるか。それによって政治への関心が増大し、議会や行政への住民参加が増し、そして投票率上昇か?と。

またその際の新たなアクターはどうか。シビル・ミニマムの時代は、住民運動に基づいた革新自治体が、問題点も抱えながらも大事なアクターでした。一方、脱シビル・ミニマムの時代は総与党化で、議会も首長に言われることを行っていく、首長も議会と対立しないという路線でやってきた。

では新シビル・ミニマムを、どういうアクターを作り出していかか。これは、政党間だけではないと思います。市民の議論の中で市民が争点を作

り出し、それをしっかり担っていく政治的主体をどう形成していくか。これにつ

### 非政治・反政治を超える政策と運動 再政治化

縮小社会における新シビル・ミニマム、その新たなアクターをどう作り出すか。一九六〇年代をシビル・ミニマムによる政治化とするならば、新シビル・ミニマムをめぐって政治化しましょう。住民はサービスを受ける対象というだけではなく、そうしたサービスを作り出す場面を設計する主体として登場して欲しい。そういう問題設定だと思っています。

まず争点です。争点は普通は浮上しません。例えば企業城下町を想定してもうえはいいと思えますが、企業城下町ではその企業が公害を引き起こしても、なかなか争点にはなりません。

非決定というのは、決定する主体として登場できないということです。わかっているとも言えないというのも「非決定」です。あるいは、防衛問題は国政の問題だから地方自治体の争点にするな、ということも非決定です。

また争点隠しというのは、例えば消費税の問題でも、何パーセントにするかという話だけ、あるいは先延ばしにするかしないかという話にとどまる。本来は社会構造全体をとらえるような争点化をしなければならぬのですが、与党も野党も、そういう根本的な議論はなかなか仕掛けていない。

そういうことから、争点は普通には出てこない。だから誰が争点を作るんですか、ということだと思っています。

つまり縮小社会における争点を、これから発見していかなければならないということ。そしてそれは誰が作るんですか、といった時には市民とか、それに気がついた政党がやらなければならないということ。アクターを発見する、創造するという

ことでは、先ほどから何度も繰り返しま

いては、それこそみなさんに教えていた

だきたいと思っています。

ですが、本来は市民が議論することによって争点を作り出して、そういう空間を作っていくか、という問題です。

ひとつ注意していただきたいのは、政治学では昨今、熟議民主主義とか討議民主主義が流行りです。今までは多数決民主主義、あるいは多元主義的民主主義と

言われていて、選挙で多数を取ったらその決定が政策につながっていく。それに対して、まずは議論することが大事じゃないですか、という熟議民主主義が流行りました。論点を明確にする。また従来考えられなかったような合意を形成

### 地方からの政治の創造 ぐらしの視点から考える

二番目、地方からの政治の創造ということ。これも当たり前のことですが、地方分権は二つの意味があって、一つは地方自治を進めるということ。地域経営の自由度が高まった、それにもなってルールが必要ですね、ということ。自治基本条例、議会基本条例が広がりました。そして地域経営の軸ということで、総合計画が大事になってきた。これを標準装備としなければいけない。それぞれに住民が関わっていく議論が大事になってきていると思います。

他方で、地方自治からの離脱の傾向があるのではないか。

市町村でできないものは県に、県にできないものは国政にという役割分担を「補完性の原則」といいます。そこから地方自治体でできないものとして、「国防の役割は国防と社会保障だ」と。地方

は文句を言うな」という議論とつながる可能性もあるわけです。そこは注意しなければいけない。

補完性の原則は大事ですが、国防とか社会保障は国政の役割だからといって全部勝手に決めていいのかという点、それは違うんじゃないですか」ということです。

もう一つは、分権が進んでいる一方で、この間の地方創生・地方版総合戦略もあり、あるいは行政の計画を義務づける政策もたくさん出ています。これは集権化の構造です。地方版総合戦略も努力義務で「絶対作れ」というわけではありませんが、作らないと補助金がでない。ほかの計画もそうです。分権が進んでいるから、そういう形で地方を縛るのか。またちょっと横道にそれますが、行政計画というのは何本くらいあるか、わか

するということ意味では、議論することは大事なことだと思っています。

ただ注意しなければならぬのは、熟議民主主義は合意を急ぐんです。そうすると、少数者の締め出しになる可能性がある。政治というのは価値観の対立ですから、少数派も尊重しなければいけないということは大原則です。

討議デモクラシーのもう一つの問題点は、多様性を前提にした議論でない、議論の場に特定の層だけがいると極端化すると言われています。市民の議論で争点を作ることは大事ですが、少数派の議論とか多様性を前提にした討議が必要ではないですか、ということだと思っています。

非政治・脱政治の流れからどう再政治化していくかということについて、六〇年代、七〇年代の経験から、縮小社会における新シビル・ミニマムの議論をどうやって巻き起こせるか。そしてそのアクターは市民じゃないですか、という議論をさせていただきました。

これはすでに北海道の栗山町、福島県山梨県の昭和町議会に提案して、作ってもらった条例があります。「総合計画の策定と運用に関する条例」で、総合計画の根拠条例です。そして、どのようなプロセスでその総合計画を作っていくかということ。

これはすでに北海道の栗山町、福島県山梨県の昭和町議会に提案して、作ってもらった条例があります。「総合計画の策定と運用に関する条例」で、総合計画の根拠条例です。そして、どのようなプロセスでその総合計画を作っていくかということ。

「地方からの課題を無視する国政」とレジュメには書いてあります。石垣市に自衛隊の基地を作るときに、まず住民投票をやりましょうと市民が提案しました。直接請求で出されたのですが、議員の多数が反対しました。その理由として、「基地問題は国政問題、防衛問題なんだから地方は発言できない」と議員の方々は言うわけです。

住民投票運動をした金城さんという方は、「国政だから、国防問題だから関われない」ということなら、思考停止になる」と。「国防」と言っておけば、あるいは「国の仕事なんだ」と言って地方が関われない。自分たちは何もできない。なるんじゃないか。とりわけ生活に密接に関わる問題について、「国防」と言った途端に何も言えなくなったら思考停止でしょう、それが民主主義なんですか、ということなんですね。(石垣島の自衛隊基地建設予定地周辺は水源にあたるため、島民の生活や農業に大きく関わる) 編集部)

私たちは地域や自分の生活に関することについて、発言する権利があると思えます。基地問題は生活に関わることで、安全保障とか自衛隊について、いいとか



8面から続く

悪いとか言っているわけではない。自分たちの生活にとって問題だと思ふことについて提言しましよ、と。もうろん、自衛隊や日米安保について問題だという人たちもいるかもしれませんが、まずはその水準で議論しましよ、と。いいことだ。

先ほど新潟県の巻町の話をしました。今は新潟市に合併していますが、一九九六年、原子力発電所建設を巡って条例に基づいた全国初の住民投票が行われました。人口規模三万人です。当時は推進派が多いのですが、結論だけ言うと生活から自治を考えよう、自治から国政を考えようという端的な例ではないかと思っています。原発ができるというのは生活にとってどうなんですかと、まずは生活から見えていく。議会や町長は推進派ですが、住民の声をしっかり聞くことが大事なんじゃないですか、と。

### 地方の政治を変えていく

#### 二元代表制の議会を作動させ、

#### 住民福祉の向上にどう結びつけるか

三番目は、地方の政治を変えていくということです。

地方分権改革の中で、地域経営の自由度は一応高まっています。機関委任事務はなくなりました。それから財政危機の中で、「あれもこれも」から「あれかこれか」を選択しなければいけない。そういう流れの中で、ようやく二元代表制が作動し始めました。

私が「的」を使っているのは、純粹な二元ではないよ、ということ。それは議会による首長の不信任議決、そして首長による議会の解散権があるということ。議会の首長を選んでいるのに、なぜ不信任議決を上げられるのか、あるいはなぜ首長が議会を解散させられるのか。これは議院内閣制の発想です。だからちよっと変則なんです。

原発の立地は市町村の認可事項ではありません。でも住民投票をやって、その地域の人たちがどう思うか発言することは、大事なことはないか。

それに市や町はどう対応するのか。国政の政策は政策として、場所の設定問題、それは切り分ける必要があるのではないか。原発政策については是非ではなく、ここに作ることにしてどうなのか、というふうに分けることが大事なんだと思います。

例えば巻町ではだめな場合は、ほかのところを考えるでしょう。それがすべてだめだったら、そこそエネルギー政策を考えたい方がいいますね、という議論なんだろうと思います。原発について反対、あるいは自衛隊について反対という論点は、それはそれでありますが、地方自治体の住民投票は、まずは生活から提案するということだと思えます。

またアメリカの大統領制では議案、予算もそうですし、法律も大統領には提案権はありません。日本の場合には首長がしっかり持っている。議会も条例の提案権はありますが、予算の提案権はない。これも変則です。

一方で今、二元代表制の揺れが起きています。日常的な対立、あるいは融合癒着というのは、大阪あるいは名古屋のようないまエージです。維新あるいは減税日本が議会の多数派を取れば、融合癒着になります。多数派をとれば、日常的な対立になります。

こうしてみると、二元代表制あるいは機関競争主義というのは難しいんです。首長に従った方が議員は楽です。あるいはいつも反対だけした方が楽です。首長と一定の距離を持って政策提言をするとい

うことは、とても難しい。こういうことは簡単には、自動的には動きません。

また総務省とか内閣府では、新たに議会内閣制というか、首長と議員が一緒になって執行部を作るとい話をしています。「癒着か」みたいな話なんです。あるいは小規模自治体に限定しています。議会について集中専門型とか多数参加型という案を、それもパッケージで出しています。

例えば少人数の専門性を有する議員で高めの報酬という、悪いことでもないとも思いますが、そこに住民参加組織を置けとか、委員会制は取らないとか、いろいろものをくっつける。余計なお世話だと思わんですが。

こうしたなかで、議会改革は第二ステージにきています。ようやく日本の自治のルールは開花した、ということが第一ステージです。これは議会基本条例にしっかり刻み込まれていると思います。

日本の地方自治では議会だけでなく、首長も選出しています。世界ではこちらの方が少ないと思います。つまり議会と首長が同じことをやったのでは意味がない、違う角度から政策競争をしましよ、ということ。そして議会は追認機関ではないので、質問するだけではな、議事としての意思を示さなければいけません。そのためには、議員間でしっかり議論する議会、なければならぬ。二元制ということから、こうしたことが導かれるわけです。

もう一つ国政と異なるのは、国政は国民代表制の原理を使います。例えばN国党の代表が議席を得ました。彼は対立争点で選ばれたわけですが、それ以外のことも何でもやっています。国会議員は自分の良心に従って行動し、発言し、最終的に評決する、というのが国民代表制の原理だからです。だから「とんでもない」と思われる国会議員でも、解散総選挙以外には辞めさせられないわけです。

地方自治は国民代表制の原理を取っていません。ですから、変なことをやら「住民が辞めさせるぞ」ということで

す。住民が議員や首長を辞めさせることができるリコール制度と、条例の制定・改廃の直接請求権を持っている。つまり日常的に住民が関わるのが原則だと思えます。

こうした原理がようやく動き出して、二〇〇六年の北海道東山町の議会基本条例を起点に、全国に広がっていった。ただし、これは大変な努力をされていると思えますが、あくまで議会運営上の問題です。それをどのように住民福祉の向上につなげていくか、ということが第二ステージでは大事になっている。それについて議会からの政策サイクルということで、連続性を持たせていくことを打ち出している。それが現在です。

これを進めるとともに、選挙というものを自治にどう生かしていくか。今日は争点を作り出すというお話をしていますが、マニフェストを中心に議論することも大事なんじゃないですか、ということ。

自治を進めるために選挙を活用しようということ。争点化については先ほど来、市民側から争点を作るという話をしました。同時に「住民自治充実のために選挙後に取り組むこと」として、「マニフェストの共有」をやっています。

今年から、地方議員選挙でもヒラを配れるようになっていきます。一応、公約とかが言っているのですが、選挙後の臨時会で、その勉強会を開いたという話は聞いたことがありません。多くのところでは会派を組んでいるわけですから、みなさんで勉強されたらいいんじゃないですか。そして必要なら協力して実現すればいいんじゃないですか、ということ。もうひとつは、質問とマニフェストを連動させるということです。「私はマニフェストにこう書いたので、こういう質問をしている」と言えば、流れがわかるわけです。また「他のマニフェストにもこういうことが書いてあった」と、共有できる。

それから「住民参加との連動」です。住民参加との連動で、マニフェストを豊富化するのをやっているのが犬山市

議会です。公募市民が議場で市政に関する提案を行い（フリースピーチ）、それを市民からの提案として議会審議に活かす、というものです。しかも一方的な提案聞き置きではなくて、市民の提案を受けて議員間でしっかり議論している。

市民のスピーチの後に全協で議論するだけではない。これはあなたのマニフェストに関連することだから、あなたがさらに詰めてください」と議員に割り振って、それをもう一度市民に戻していく。まさに議場が市民と議論する空間になっているわけです。そういう意味でもマニフェストの議論が大事です。

それから政党会派なら、マニフェストや公約を作るうえで先輩とか政党が手伝ってくれると思いますが、普通の人はなかなかできません。市民といっしょに作るというつもり、それを支援することが必要だろうと思います。

行政によるマニフェスト作成支援も始まっていますが、「議会によるマニフェスト支援」というのもあります。北海道の浦幌町では、議員になりたい人、あるいは政治に関心のある人に研修をやらすよ。北海道浦幌町議会個人個別研修会」というもので、五回にわたって「二元代表制と議会の役割」、「議員の職務と議員活動」、「定数と議員報酬の考え方」、「議会とは」、「それから例規集の話とか予算の見方、最終的に議員マニフェストや立候補の手続きなどについて、研修を行います。そうやって関心を持った人のなかから、新たに立候補する人が出てくる。そういう仕掛けでもあるわけです。（定数11に14人が立候補、20代から40代の四人の新人議員が誕生した／編集部）

また「政策型選挙のためのマニフェストの射程」ということでは、そもそもマニフェストというのは討議空間を作り出すための要素なんだ、ということ。首長マニフェストについては、「選挙で選ばれたから私が民意だ、だから実現するんだ」というイメージもあるかもしれない。首長だけが民意だ、だから実現するんだ」というイメージもあるかもしれない。

それから「住民参加との連動」です。住民参加との連動で、マニフェストを豊富化するのをやっているのが犬山市

あります。またマニフェストには現れていない政策も大事です。だからそれぞれが持ち寄って議論する空間を作り出すための素材なんです。これがマニフェストの意味ではないか、ということ。簡単に言えば、マニフェストに書いたから実現することではなくて、公共空間、討議空間における討議を行うための素材という位置づけだと思います。

縮小社会のマニフェストについては、先ほどお話しした新シビル・ミニマムのことになります。比較の基準、おおよび議論の前提が必要になります。「その際、比較可能とするには総合計画に対する評価が順当であろう」と。だから選挙にあたっては、総合計画についての評価を必ず入れることだと思えます。

もう一つは、自治基本条例や議会基本条例の評価です。それぞれがバラバラだとなかなか評価ができません。少なくともこの二つについて書き込むことにより、比較することができるのではないかと思います。

一月8日の自治日報に「統一地方選挙を住民自治充実に」と書きました。「マニフェストをめぐる新たな二つの論点」として、新シビル・ミニマムということと、「マニフェスト」というのは議論する空間をつくる素材なんです」ということを書いています。そして「市会議員選挙の公約の判断基準」として、白川さんたちの取り組みを紹介させていただきました。

議会改革とともに住民自治をどう進展させていくか。そういう意味では、議会改革というのは主権者教育、政治教育と連動していることかと思えます。

繰り返しますが、新しい時代の争点というのは市民が作っていくということ、そして市民が争点を明確にすることで、政治や行政が近いんだ、自分たちが関わるんだという意識を広げることが大事なかなと思っています。

(8月4日。文責は編集部)

□「がんばろう、日本」 国民協議会 第九回大会 第一回総会 問題提起と報告□

9面から続く

# 消費者民主主義からの分解と再政治化

戸田政康・「がんばろう、日本」 国民協議会 代表

## 無関心層・非決定の堆積（安倍支持の空気）と再政治化への糸口

江藤先生の提起を受けて。

一つはナチ型の全体主義は街頭や集会で声をあげる、直接民主主義の要素を前面に出しますが、日本型の全体主義は「空気」「翼賛」です。声をあげるのではなく「沈黙」「無関心」。

無党派層ということがずっと言われてきましたが、もうひとつ無関心層というものが見えつつある。無党派層と無関心層に主体的な境界線はありません。ただ当事者性で考えていない点は同じでも、会話の仕方、コミュニケーションが違います。

いわゆる「安倍支持の空気」といわれるものが一部、新聞でも報道されるようになりました。これを象徴しているのが、就職氷河期世代の心象風景です。「政治は助けてくれない／だから変わらなくていい」、「だって自己責任でしょ」と。一方、政権側は「人生再挑戦世代」とか言って、幻想と一部補助金で新たな票田にしようとしているわけです。

消費者民主主義、依存と分配の完全なる挙国一致でポスト冷戦、グローバル化時代に入ったのは日本だけです。これでは時代が転換したときに「右肩上がりから縮退社会への転換」、とりあえず延命せなあかんという方（今だけ、金だけ、自分だけ）なのか、持続可能性―未来への責任なのかという争点設定はできません。

の「非決定」とは、まったく違う人生観になる。

また六〇年代、七〇年代は道路や下水道などの社会資本の充実、また公害問題への対策などのシビル・ミニマムが争点化されていたのが、それらが一定程度達成され、同時にニーズが多様化するのに伴って争点が拡散される。そして「私生活」や「市場」の領域が拡大すること、さまざまな問題が政治化されにくくなる。いわゆる自己責任論の土壌です。

そのうえで今日の「新シビル・ミニマム」つまり多様な社会観、社会政策観をどう取り上げるか、という課題に直面してい

るわけです。

例えば今回の「日本再生」では、「今回の参院選を、『制度の外』からの当事者の声を政治の課題設定へとつなげていく、始まりの始まり」にできるか」として、稲葉剛さんの言葉を引用しています。「ただそれ（政策転換の萌芽）が旧システムの終わりの始まりになるかは未知数です。投票率は低く、日本では自己責任論が広がり、社会としての連帯感10年前より後退している印象さえあるからです」と。新たな争点化の「始まりの始まり」ではあるが、一方でマイナスの要素も多々あるということです。

### 民主主義の死は選挙から始まる

### 争点設定の主体性が問われている

非決定、ということも言われました。

政治を語って相手の感情を揺さぶる能力がないのは、その本人が生活感覚を持っていないか、それとも目先の利害―自分がバツをつけたい―だけなのか、どちらかです。

感情を揺さぶるのが芸術なのに、誰かの感情を害するという理由で、自由な表現が制限されるケースが増えていきます。これを放っておいたら、どうなりますか。政治の争点設定についても、感情を害する人がいるということになります。

財政民主主義という観点をあいまいにしているから、消費税も「今は増税する時期か」とか、何パーセントならいいのかわからない状況論に終始する。これでは争点化できません。

税金は金持ちや特権階級からとればいい、という時代ではなくなった、つまり財政民主主義というときにどうするか。自分たちの必要を支えるために政府を構成し、そのための財源を広く参加して支えるということ。そういうことが全部抜けて、「景気がいいかどうか」、「どの時期に増税するか」だけになっている。「金持ちから取れ」というのは、その裏返しです。増税不要論と先送り論がコイ

こういことです。

時代の転換や「ファシズム」の攻防といったとき、権力を握っている方は争点を消す。それによって民主主義が後退していくんです。かつてはクーデターとか暴力革命、人民革命が民主主義を殺していたわけですが、現代の民主主義の死は選挙から始まるということです。

例えば安倍政治は、解散権を使って二年くらいでリセットを繰り返す。解散して選挙で勝てば「信任された」ということで、政権への検証や追及も「選挙で支持されたんですから」で門前払いする。追及する側も、それに対する二の矢、三の矢が出ません。

日常のなかにもあるでしょう。「俺も非は認めているんだから、それ以上はあんまり言わないでよ」ということが。生き方や社会のかわり方を変えるという主体転換まで問われることを避けようとする、消費者民主主義―依存と分配の分解です。自分が依存と分配、消費者民主主義に染まり切っていたという自覚がない。それとは違う問題設定が見えないから、消費者民主主義、依存と分配と言っても他人称なんです。

言いたいことは、主権は国民にあるという形式になっていることが、熟議とか議論とか自治にかかわる主体性を作れないない度合いに応じて、マイナーなポピュリズムになる。勝負はここにあるわけです。

二点目は自治から政治を考える、くらしと政治。自治、地域から国政を考える。言葉で言うところ、地域の課題を共有する活動から公共性は生まれてくる。それ以外では生まれません。それが抜けていると「お国のため」が公共になる。そして最後の逃げ場が「国家」、ナショナルリズムです。「俺はどうしようもないかもしれないが、従軍慰安婦みたいなことに、日本人だったら異議申し立てをするのは当たり前じゃないか」と。こういうのは強制された自発性です。行き場のない現状を、一発でひっくり返したい。そういう人たちは、強制された自発性

10面から続く

とは思っていません。しかし戦前の勤労奉仕はお金が出ましたか？ ボランティアです。3.11でも一部ですが、絆絆ということが、逆にいろいろなことを縛るようになった。東京オリンピックでも間違いなく、強制された自発性がいろいろみられるでしょう。

重ねて言いますが、勤労奉仕もボランティアです。それが実質上は強制だということがわかる人たちは、自分の意思や自由ということがわかる人たちで、戦前は一般の国民ではなく有産階

### 消費者民主主義からの分解と再政治化 付度・無関心層と「くらしとせいで」

三点目に消費者民主主義とか依存と分配からの分解が、団塊ジュニア世代、就職氷河期世代のところから始まっていることについて。

正規雇用は狭き門ですから、そこは自分は生き残ったということ、東大なんかを出た部分もい意味のエリート意識ではなくて、生き残るためには付度すること以外にならざるを得ることになってくるわけです。

また社会問題についても新自由主義の規制緩和で、マーケットで解決すればいい社会的企業家になる。そこから「それで政治が必要ない」ということです。おかしな話ですね。とこのままだで行っている人は、また少ないでしょう。むしろ「どうやって新しい社会的地位を得ているんじゃないでしょうか。」

こうした新たな無関心層ができていくという意味を、深く考える必要がある。だから「くらしとせいで」と言っているんです。

これと本質的には同じですが、新自由主義になって以降、争点化できていないところには、ビジョンが同じだからということもありません。新自由主義で市場に任せるというやりかたに対して「それで持続可能性はあるんですか」「持続

級です。

しかし今回は庶民であろうと、当事者性のなかには、お国のために強制されたボランティアとは何か違うよね、ということがわかる空間ができてきていることは事実です。ただしまだまだ、そういうことが結びついている人は限定されます。

この辺のことは、自治の領域では今日の江藤さんのお話にもあるような、地方政治の負の連鎖と正の連鎖ということで見ることが出来ます。

可能性を担保するためには、循環型の経済システムに転換する必要があります。それは放っておいてできるんですか」というビジョンの対立軸がなくてはならない。

また最近のSDG（国連が定めた持続可能な開発目標）とよく言われますが、それだって官僚機構や縦型のシステムで決めればできるんですか。それに代わる決め方や実行のシステムとはどういうことなのか。そういうビジョンの対立軸が必要でしょう。

「再政治化」というのは、そういうことでもありわけです。

ビジョンという意味がどこまでわかっているかは別にしても、ビジョンを持たないかんといいことは、権力を握れば何でもできるということからはできてきません。やっぱり政治―右肩上がりの時の政治とは違いますが―を忘れたカナリアになっているんです。

右肩上がりのときには基本的に与野党ともに依存と分配で、違いはどこに分配するか、だった。依存と分配という基本には違いがなかったから、消費者民主主義一色になるわけです。政治に社会性がないままだから、冷戦後は新自由主義一色になる。そしてこれではもう生きていけない、というのが就職氷河期から。

そこで日本では初めて「自分の人生は自分で作っていかざるをえない」というルールなき時代になった。

レールのない時代、自分の人生は自分が切り開いていくしかない。親の世代は「根性がないんだ、耐えろ」とか「忍耐も人生だ」と言うかもしれないが、自分の人生は自分で切り開かなくてはならないからこそ、人間としての尊厳や生存権は社会が、したがって政治がちゃんと保障せなあかんんじゃないかと。

### 「ポスト安倍政治」の問題設定とは

補足として。

争点設定ということを経験した人と、そういうことは誰かやってくれらなうというお任せ民主主義では、見えるものが大分違ってきます。マニフェストでも、その経験があると、所属している政党は今度の選挙で争点設定を明確にしてない、なぜなのかと。社会的な政治的な体験や経験の違いによって、見える風景がダイナミックに違って来る。

また日本は戦前のファシズムとの闘争がありませんが、ヨーロッパ各国にはそれぞれ反ファシズム統一戦線の経験があります。つまりファシズムに反対するための共同綱領とか、政策綱領の経験があるわけです。日本での革新自治体とか社共共闘は、共同綱領まで行っていない。だから革新ベルト地帯というところまで行っただけで、社共合意で共産党との関係を断つという時に、深い説明はなかった。「正面の利害関係」という範疇では、共同綱領は作れません。

野党共闘も、参院選は候補者調整の範疇でもいいですが、もちろんそれだって大変な努力が必要ですが、衆議院選挙は政権選択選挙ですから、候補者調整の延長では収まらない。政権側は「こんな野合で政権を任せられますか」とキャンペーンを張るでしょう。

重ねて言いますが、「選挙というプロセスをばさんだ民主主義の崩壊は、恐ろ

民主主義というのは、次の世代の問題設定―民主主義のインベションと言ったりします―まで、バトンをつながなければならぬ。そこにつなぐまで、走り続けなければならぬのです。

韓国なんかは、民主化の歴史を世代間で受け継いでいる。だから映画もつくれるし、今の文政権への評価も一色ではない。民主主義のバトンをつなぐという問題設定は、ある意味で日本では初めてです。

しいほど見えにくい」んです。負けたほうは「負けたんだからしょうがない」ということで、何も考えない。

また選挙に勝ったほうは、解散権を使って選挙を空洞化させていく。同時に人事権を使って官僚機構をコントロールする。アメリカは制度的にも政治任用でトランプ政権はしょっちゅう交代させていますが、安倍政権は憲法で公僕と規定されている官僚を、政権の意に沿うように私物化する。意に沿わないものには徹底的に報復する。

官邸主導、政治主導というときに、新しい公共のために古い公僕精神をどう継承するか、ということがいっさい入っていないことの結果でもあるわけです。だから官邸にも付度官僚にも、後ろめたさはまったくありません。文字通り「今だけ、金だけ、自分だけ」。

そして短期間の間に選挙を繰り返してリセットすることで、長期政権を築く。短期政権の連続だから、社会保障など長いスパンの重要な問題、懸案事項は何もやっていない。したがって外交もムチャクチャになっている。

そして選挙で支持されているというところで、メディアをメディアでなくする。安倍政権になって以降、メディアと政権の関係は明らかに変わりました。また今回の参院選では、内容抜きの選挙関連の報道さえ、大幅に減りました。ましてや

争点を提起するような報道や、検証報道はほぼ皆無です。ただこれも、ロシアなどのように政権批判のジャーナリストが暗殺されるとかいう形ではなくて、自発的隸従という形で進むわけです。

三点目に、議会等々のルール、慣習を多数決主義のやり方に変える。これも軍靴の音がしてファシズムが来たとか、暴力革命やクーデターで民主主義が破壊されたということではなくて、選挙を通じて分断を深め、選挙で勝ったのだから民意はわれわれの方にあるということまで、議論ではなく数で決めていく。

民主主義の場合は三権分立、メディアも入れれば四権ですが、その相互関係を選挙を通じて解体するわけです。とくに議論の空間―議会を機能させない、メディアを言いなりにする。形式的に議会はあっても、実質的な議論はない、はじめから数で決まることは分かっている。選挙を通じて議会、議論の場、公共の場をシワシワと絞殺していくという方法をとりま。

三権あるいは四権の立憲民主主義的

### 報告 選挙と住民自治の深化

#### 白石・練馬区議

練馬区は四月の地方選挙で、立憲民主党はパリテというところで、女性二名、男性二名が立候補、当選して第四会派になりました。ただ議会の中では五人が交渉会派なので、自民党、公明党、共産党の三名で幹事長会が行われています。議会運営委員会には、三名以上の会派が参加するのですが。

少数意見をどこに取り入れていくか、そのプロセスはどうするかということ、を、議運の中で幹事長会派に入れない会派が問題提起するわけですが、今のところ数の論理のなかで、なかなか通らないという現状があります。

今回は、沖縄の県民投票を踏まえて民意を反映させる対話を求める意見書を、議員提出議案としました。最初は幹事長

な相互関係が対象認識にはいっていないと、「だって裁判官もおかしらだろ」とか「朝日は嫌いだ」ということで終わる。テロひとつもないまま、何の抵抗もなく民主主義が静かに死んでいく日本の現状が、ここにあるわけです。

そういう意味では、消費者民主主義から来ている多くの人が、実は民主主義を死なせる側の加害者なんです。これが安倍政治の下で進行している。

熟議だとか討議だとか、住民自治の涵養と結びつく議会の論議ということが自分の生き方になっていないと、「民意に支持されている」という攻撃の前に黙り込むしかなくなる。「その民意は、金だけ、自分だけ」でしょう、「それで持続可能なんですか」という問題提起は、形式的にもできません。

続いてそれぞれの報告をお願いいたします。課題や方向性はおおむね一致している、そこに至る経験の総括は違いますが、それぞれの切り口から報告、提起をしてください。

会派の共産党に委ねたのですが、剣もほろろの対応で、それでは議運で私たちが議員提出議案として提出します。幹事長会で否定されたんだから、出す理由はないでしょうと言われましたが、私たちは議運でしか言えませんが、議運で言わせていただきます。そして、反対される内容ではないんじゃないですかと。住民投票の結果の民意を反映させる仕組みほどの自治体にも必要で、辺野古の問題だけではないんじゃないですか、と。

最終的には本議会に出されて否決されたという経過がありました。

じつはこの意見書を出してこれというものは、市民からの声だったんです。ただ委員会に上げてしまうと陳情になる。陳情や請願を扱ってくれる場面が、練馬区

11面から続く

議会ではあまりないものですが、私たちが野党に働きかけがあって、区民の声を反映した形が作れたというところでした。

参議院選挙については、立憲民主党は正直、惨敗だと思っています。東京で二人候補者を出しておきながら、二人勝たせられなかった。それも、たった三万票取れないために。そこについては、私たち地方議員の中でも意見が出されています。何とか次に向けた糧にしていきたいと思っています。

票数を見ると、練馬では八万八千が自民党、公明党が四万二千、立憲が六万四千、そして共産党が三万八千、維新が二万七千ですが、気になったのが、無効投票が二万六千です。選挙には行くけれど、比例では政党を批判したいとか、無効投票を投じるというスタイルがあるわけです。

その意味でも、無効投票の二万六千あるいはそれと関連して無党派層をどう見るかというところに反省点を持って行かないといけないのではないかと。

私たち地方議員が百二十七名、東京都連の選挙区ではほぼ勝っているのですが、そのメンバーを含めて、今後しっかりと草の根から政策を立案していくことが伴わないと、今回の参議院は躍進とは言えないんじゃないかなと感じています。

畑口・小豆島

参議院選挙の香川選挙区の取り組みとその結果、総括について。  
参議院の香川選挙区は前回、全国で唯一、共産党公認候補を野党統一候補にしました。今回は連合香川と社民党、国民民主、立憲民主の統一候補として尾田美和子さんという新人を立て、共産党が公認候補をおろして一応野党統一という形でやりました。

結果としては自民党が十九万、尾田さんが十五万、四万票差で落選したわけですが、過去の香川選挙区の結果から見れば、政権交代の時を除けば、もっとも差が縮まった選挙だったと見えています。野党共闘がそれなりに機能したところ

では、選挙区の票が比例での政党の合計を上回っていますが、香川でも尾田さんの票が十五万、四野党の比例票の合計が十一万です。推薦した四野党の支持票はほぼ押さえたと思います。その上に四万上積みされているということは、女性票を含めてかなり広がりはあったんじゃないかと見えています。

小豆島で個人演説会をやった時も、最初は平日の夕方早い時間からで、これの人が集まるのかと半ばあきらめていたんですが、それでも島内二町合わせて二百名近く来た。どこから来たんだろう、という感じにもなりました。

尾田美和子さんという候補は、西陣織の研究者から伝統工芸品のプロデュースをする会社を興して、中小企業のコサルタントとかプロデュースをしている人で、政策としては中小企業政策だけ。最初聞いた時は、これだけでやれるのかなという気もしたんですが、何回も街頭演説などを聞いてみると、途中からは農業や中小企業の後継者問題、あるいは伝統工芸品の技術や文化の継承ということも、政治の場には持ち込めないかということが伝わってくるようになってきた。いわゆる既存政党の足し算を上回る求心力、メッセージ、新しい政策思想ということのヒントは、ちょっとあったのかなと思います。

農業や中小企業の後継者や文化の継承といった課題は、依存と分配の枠内での補助制度では到底解決できない問題で、今までそういう問題を正面から訴えた議員や候補者は、いなかったんじゃないか。そういうことを、もっと効果的に政策化して訴えることができれば、可能性はあったんじゃないかと思っています。

白川・越谷市議

越谷での取り組みは「一灯照隅」「日本再生」483号)に書きましたので、少し別の角度から話します。  
候補者も市民も「政策はどつてもいい」という人は一人もいません。選挙に強く、政策も強いというのが理想です

ね。選挙は強いけど政策は弱いか、政策は強いけど選挙は弱いというのは、よく言われます。何が言いたいかというと、政策の訴え方や政策軸の転換が見えなかったら、旧来通りの訴え方をいくらやっても票は増えないということです。争点の設定ということも、たとえば迷惑施設を作るのにイエスカノーかのようにな、どっちかを選べると有権者は投票に行く、というイメージだと思えますが、そうではないということです。

今回のマニフェストでは、〇〇をしますとか、〇〇を実現しますとか、財源はこうですということはいささか言いませんでした。この問題についてはこういう考え方があるんじゃないか、この問題の解決にはこういう材料があるんじゃないか、その時にこう話した方がいいんじゃないかと。イエスカノーか、AかBかという二項対立でどっちかを選べとは言っていないんです。

これまでの延長ではない人口減少時代、縮退時代の時に、こういうふうにならわれば考えます。そういうことを言っている候補は一人もいませんでしたから、それが結局差別化になって、争点と言えは争点だったと思います。

二つ目は、ビジョンの話です。たとえば公共施設マネジメントは、どの自治体でもやっていると思います。公共施設が更新時期になっている、全部建替えるとなると金がないので縮小します、という計画を立てるわけです。役所は財政がもたないからとか、人口が減るとかを理由にしている。

これに対して市民の方は「ビジョンがなくて、どうしたいかがなくて潰す、潰すという話ばかり役所はするんですよ」と。やっぱり市民の皆さんは、自分たちのまちをどうしたいか、どうなっているかというところに非常に関心を持っておられる。どんなに小さくても、どんなに数が少なくても、どうしたいのかということとしては、ビジョンは出てこないんだと思います。

三つ目は、当事者意識の涵養という問題です。昨日、埼玉立憲力フェスというところで、お母さんが子どもが不登校になつていてという話をされました。子どもの不登校の問題では、小さい時から同質性、均質性を刷り込まれているので、お母さんが一番「子どもを学校にやらなければ」と追い詰められている。ここを解放しないと、誰かを悪者にして解決できることではないんだという話をした後に、あるお母さんがそっと手を挙げて、私は本当に子どもを学校にやらないかん、やらないかんと思っています。それが今日聞いた話で本当に違うんだと、泣きながら言うわけです。当事者はそれほど苦しんでいるわけです。

この空間を作れないと、これだけ自己責任が言われているなかでは、なかなか言えない。選挙の時、そういう場が作れるはずなんです。でも「私を議会に送ってこれれば地域の問題を解決します」としか言わないでしょう。こんなことでは、投票率下がるに決まっていますよ。

吉田・埼玉政経セミナー  
私は去年から埼玉政経セミナーに入つたので、よくわからない状態で今日来ています。白川さんとは十年くらい、別の団体で知り合いました。学校の問題も地域も自治会も、ましてやわれわれのよゆうな中小の経営者ですら、すべてにおいて無関心だということに、とにかく腹が立っていて、いつも白川さんに愚痴をこぼしていたら、ちょっと来なさいと。選挙が始まるので「吉田さんにマニフェスト書いてもらうから」と。何という無茶ぶりと思ったんですが、何とか書きました。

私自身、自己責任論というものにずっと納得がいてなかつたんです。大学一年の時にバブルが崩壊して、レールがすべてなくなつて、これまで言われていた通りにやろうと思うと、全部目の前でつぶされる。就職も子育ても、結婚も年金も。学校や親に言われた通りにやっていたはずなのに、うまく行かない。でも、うまく行かない理由は「お前が悪い」と。そこはずっと疑問に思っていて、ですから前書きの部分に「これまでのやり方

はもう限界だと思いませんか」と書いています。私だけではなくて、多くの人が何かおかしいと感じているんじゃないかと思つて、そこは一番強く書くようにしました。

また具体的なところも、公約ではないけれど、こういったことについて今後話し合っていきたい、対話のツールにしていきたいということで、社会保障の問題とか、総合計画の問題とか、子どもの不登校の問題などをあげました。それも埼玉のどこでも共有できるような形で書いています。

全部に引っかけられる人はいないと思いますが、その中のどこかに「そうだね、これ問題だね」と思ってくれば、その地域、その地域でシンポジウムをやりたいと思います。

今回はマニフェストという形で作りましたが、持っている方によっては対話のツールになるんじゃないか。その地域に合うテーマをうまく選ぶことができればいいと思うし、そうすると各地域に同じような考え方や疑問点を持っている人を増やしていかなきゃいけないんだなとか、無関心な人にどうこっちを向いても

8月22日、越谷で開催された埼玉県知事選・大野もとひろ候補の個人演説会では、候補者↓支持者という形式だけではなく、市民が県知事選への思いを語る場となった。「伴走できる行政であつてほしい」「子ども食堂をやっている女性」

選挙を、自治の当事者性を育む場に



らえるか、考えないといけない。いろいろ課題が見えてきたと思つています。  
白川  
「一灯照隅」にも書きましたが、今回の私の選挙では、「市民税と固定資産税を上げます」と、はっきり言いました。それも市民がマイクを持って。もちろん、何のためか、どう税に向き合うべきかもちゃんと言います。正面から言ったら、反発する人もいますが、聞こうとする人もいるわけです。  
とくに若い人は「何言ってるのかな」と。これは重要ですよ。正面から言わないで、恐る恐る言うから、「一体、何を言いたいんですか」と、考えている市民ほど不感感が先に立つわけです。  
つまり政治文化を変えるということ、選挙のあり方を変えるということ、候補者もそうですが、なにより市民が変わらなければならぬんです。候補者は市民に弱いんですから。市民の皆さんがここまでやれと言えれば、受ける候補者はいるはずですよ。  
(8月4日。文責・編集部)

「バス路線を守るためではなくコミュニティを守る」「バス運転手」「介護や子育ての経験からなど。」「くらしとせじ」の当事者性は、立ち見も出る会場に一体感と集中を生み出した。  
選挙を、自治の当事者性を育む場に。